伝書鳩

第23号

井上靖記念文化財団

猟銃

その人は大きなマドロスパイプを銜(くわ)え、セッターを先に立て、長靴で霜柱を踏みしだき乍ら、初冬の天城の間道の叢をゆっくり分け登って行った。二十五発の銃弾の腰帯(バンド)、黒褐色の革の上衣、その上に置かれたチャアチル二連銃、生きものの命断つ白く光れる鋼鉄の器具で、かくも冷たく武装しなければならぬものは何であろうか。行きずりのその長身の猟人(ひと)の背後姿に、私はなぜか強く心惹かれた。

その後、都会の駅や盛り場の夜更けなどで、私はふと、ああ、あの猟人(ひと)のように歩きたいと思うことがある。ゆっくりと、静かに、冷たく——。そんな時きまって私の瞼の中で、猟人の背景をなすものは、初冬の天城の冷たい背景ではなく、どこか落莫とした白い河床であった。そして一個の磨き光れる猟銃は、中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺印(スタンプ)しながら、生きものに照準された時は決して見せない、ふしぎな血ぬられた美しさを放射しているのであった。

（小説『猟銃』より）

伝書鳩 第23号　目次

猟銃（作中詩）　井上靖……2

退任のご挨拶　井上修一……6

就任のご挨拶　浦城義明……8

井上先生との出会い　峰岸成次……10

世界文学としての『猟銃』　坂巻隆裕……16

鳩のおしらせ①……21

井上靖未発表資料＊7

終戦前後日記 1（監修・解説　高木伸幸）……22

三十年ごしの観音様　井上方良……48

令和三年度　事業報告……52

鳩のおしらせ②……63

鳩のカット　福井欧夏

花のカット　黒田佳子

奥付のカット　岩永　泉

退任のご挨拶

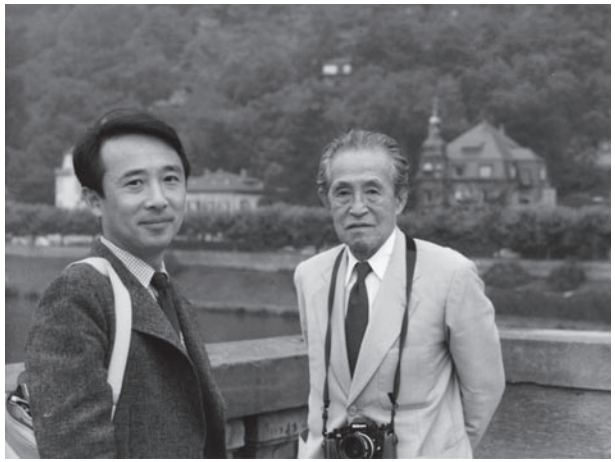
前理事長　井上修一

今年の六月の臨時理事会で理事長を退任いたしました。年齢とともに理事長職を続けていく自信がなくなってきました。今後は一理事としてお手伝いさせていただくつもりです。

平成三年に父靖が亡くなり、翌年母とともに財団を立ち上げ、以後、小学館の故相賀徹夫氏、小西国際交流財団の故小西甚右衛門氏をはじめとする多くの方々にご指導、ご鞭撻をいただいてまいりました。心より御礼申し上げます。財団法人から一般財団法人への移行もございました。当初は相賀氏の一ツ橋綜合財団の多大なるご支援のもとで、現在は父の生誕の地の旭川市のご協力を得て事業を行っております。

また同じ臨時理事会で、靖の孫の二名に財団の代表理事（理事長浦城義明・専務理事井上敦夫）を託すことも認めていただきました。ご指導のほどくれぐれもよろしくお願い申しあげます。

令和四年十一月吉日



前理事長・井上修一と父・井上靖
1981年9月初旬、旅行先のドイツ・ハイデルベルグにて

新理事長・浦城義明と祖父・井上靖
1976年11月3日、文化勲章親授式後に自宅にて

就任のご挨拶

理事長　浦城義明

一九九二年三月に設立した本財団は今年で三十年の節目を迎えることができました。長年にわたる皆様方のご支援の賜物であり、改めて心より感謝申し上げます。

さて六月に開催されました本年度財団理事会におきまして、新しく私が理事長を拝命いたしました。この場をお借りしてご挨拶をさせていただきます。

本財団が設立された三十年前といえば、私は社会人三年目の春。ちょうど世田谷の家で祖母ふみと同居し始めた頃でした。はたして財団設立構想はいつからあったのか、そもそも誰の発案だったのでしょうか。実のところ、私自身は聞いたことがありません。ただ靖という大黒柱を失った喪失感に浸る間もなく、井上家はこの財団設立、運営に向けて走り出したのです。ふみが二〇〇八年に亡くなるまで十六年間、その後叔父の修一が十三年間理事長職を務めました。この間に公益法人の制度改革に伴う一般財団法人への移行、また二〇一六年からは旭川市との連携事業協定を結んでいます。皆様のお知恵を借りながら、不慣れながらも井上家の遺族たちは力を合わせて財団運営に心血を注いできました。

三代目となる私のミッションも「井上靖の業績と遺志を永く後世に伝える」という財団設立の目的をしっかりと果たしていくことです。その責務の重さを痛感しております。靖が亡くなってから年月がたち、靖を知る方もだんだんと少なくなってきました。これからは新しい世代に靖の業績を伝えていくことが大切です。そのためには、まず自分自身が祖父である井上靖のことをきちんと知ることだと考えています。改めてその作品に目を通したいと思います。また何より母、叔父、叔母たちから、そして靖と関わった多くの方々から元気なうちに、年譜に載っていない生身の靖の話を聞いてみたいと思います。どんな人生であったのか、何を残したかったのか。正しく伝えていかなければなりません。

微力ではありますが、一生懸命お役目を務めさせていただきます。今後とも皆様の温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和四年十一月吉日

井上先生との出会い

峰岸成次（大阪井上靖文庫）

昭和三十七（一九六二）年頃に、故郷の宇和島の映画館で、『しろばんば』を観ました。この映画は井上先生の少年時代の物語です。なかでも映画のラストシーンはとても心に残っています。さき子先生が亡くなり、そのお葬式の日に洪作達、子供二十人くらいが、天城峠へ向かって、「なむまいだ、なむまいだ」と念仏を唱えて歩いて行きます。子供なりに死を悼んでいる姿に心打たれました。

私も宇和島市の近郊の山村で育ちましたので、遊び方は映画と大体同じでした。山や川で遊んだり、田んぼや野原を走って、転んだりしたものです。山では小鳥のワナを仕掛けました。小鳥がワナに掛かった時は、それはそれで可哀相でした。『続しろばんば』の中頃に、洪作たちがワナに掛かった小鳥の屍を見て生き物の命について考える場面がありますが、私もまた同じ思いでした。

一九六六年に、仕事の転勤で大阪へやって来ました。休みに梅田の古書店で昭和三十六（一九六一）年前後に刊行された『井上靖文庫』全二十六冊を見つけ、即、求めました。移動は電車だったのでとても重かったのですが、宝物でしたので喜びの方が強く記憶に残っています。

その『井上靖文庫』の「月報」七号に掲載されている、『サンデー毎日』で先生の同僚だった丸野不二男さんの「井上さんの耳」が心に留まりました。

大阪梅田の阪急前で、ふみ夫人が何日もかけて、道行く女性に針をさしてもらった千人針を身に着けて、先生は中国へと出征されます。昭和十二（一九三七）年九月のことです。翌年に病気になり、先生は石家荘の野戦病院に収容されますが、このときのことを詠んだ「石門（せきもん）に井上靖ら傷病兵庇いし日あり遥けきを憶う」という歌を、千葉の柴田清一郎さんが朝日歌壇に寄せておられます。柴田さんは野戦病院で護衛をされていた方ですが、先生はご存じないのではと思います。

丸野さんは、日本に戻った先生から千人針を借り受け、『サンデー毎日』の特派員として中国各地を一年間巡り、無事帰国されました。次にこの千人針は、南方を転戦することになる和歌山の竹本辰夫さんにわたりましたが、竹本さんも無事に復員されました。この千人針は三人の命を守ったことになるでしょう。しかし、竹本さんが収容所に入れられた時、千人針はそれを欲しがった米兵達により小さく切り分けられ、井上家に戻ったときには十センチ四方になっていたそうです。

昭和四十九（一九七四）年十月に、岩波書店の文化講演会が京都会館であり、満員の会場の一番後から先生の「歴史小説と史実」のお話を聞きました。先生にいつかお目にかかりたいと願っていましたので、講演が聞けて本当に感動しました。

この頃、『井上靖小説全集』三十二巻の刊行が始まり、昭和五十（一九七五）年五月に完結しました。先生は三十二巻の毎号に自作解題を書かれています。これは大変なことと思います。すべての作品に目を通されたのではないでしょうか。小説や詩の執筆、講演、取材、そして海外へも足をのばされる多忙な中でのお仕事で、誰でも出来るものではありません。

昭和五十三（一九七八）年六月に、大阪朝日生命ホールで講演会があり、弟と出掛けました。講演後のサイン会で、私は『わが母の記』にサインを頂きました。中学生くらいの少年が『あすなろ物語』の文庫本を開きサインをもらっていましたが、私の方は箱入りの本でしたので少年に悪いような気がしました。

竹中郁さん（右）との合同祝賀会で壇上に立たれる井上先生

昭和五十五（一九八〇）年三月十二日、大阪ホテルプラザで『井上靖全詩集』と竹中郁さんの第九詩集の出版を祝う会がありました。出席者は二百人くらいでしょうか。関西の詩人、画家、作家達が集まり、先生は「私の小説家としての出発は関西です」と話されました。『井上靖全詩集』に私の名前を入れてサインを頂き、その時に、河井寛次郎さんの詩の冊子を先生に差し上げました。この会は私にとって忘れることの出来ない会です。

詩人の小野十三郎さんが、関西の若い詩人達に、「井上君を紹介しよう」と話していました。杉山平一さんのエッセイや安西冬衛さんの日記によれば、井上先生は戦後、関西の詩人達に『毎日新聞』での執筆の機会をつくるため、手をつくされたようです。安西さん、杉山さん、竹中さんなどもそのような詩人達ではなかったでしょうか。

昭和六十三（一九八八）年三月十八日、梅田阪急百貨店で開催されている「敦煌・西夏 王国展」に足を運びました。会場へ入ろうと思っていると、前方から聞き覚えのある声とともに四、五人の一団がこちらにやって来ます。井上先生でした。私は即座にごあいさつし一緒に会場に入り、西夏の展事物について「中国の仏像はお顔が下ぶくれです」などと先生からお教えいただきました。出口で徳間書店発行の『敦煌』を一冊求め、サインをお願いしました。

なら・シルクロード博の会場に立つ井上先生。右はふみ夫人、左は上田繁潔知事と思われる

同年四月二十四日、井上先生が総合プロデューサーを務める「なら・シルクロード博覧会」がスタートしました。シルクロードの終着点である奈良市が会場となり、半年間の開催期間中、古都はシルクロード一色に染まりました。

この博覧会の開催については、奈良県の上田繁潔知事が、井上先生に相談されたそうです。「開催まで二年しかありません」という知事に対して、先生は「やりましょう！　二年でもやれます。三年あっても同じです!!」と答え、知事が「わかりました！」と返事されて、工事がスタートしたそうです。

私は開会式、閉会式、そして別の日に二度、会場に赴きました。シルクロードの現地には行ったことがない私でしたが、敦煌莫高窟十七窟の再現、交脚弥勒のレプリカの大きさには本当にびっくりしました。パビリオンの「タクラマ館」で、砂を手にとると熱く、こ

「井上靖・シルクロードの足跡館」完成記念式典でのテープカット（1988年4月22日）

れは現地の砂を持って来て温度管理をしているのだろうと思いました。

先生のパビリオン「井上靖・シルクロードの足跡館」は、まさに「井上靖の世界」でした。学生時代からシルクロードについて勉強され、小説家になられてから、現地に行かないで『敦煌』や『楼蘭』を文献をもとに書かれた先生の、シルクロードへの想いの集大成といってもよいのではないかと思いました。

奈良の街で、そして会場で、博覧会のイメージソング「夢・浪漫・ＮＡＲＡ」が流れていました。私は土産品として楼蘭の砂、ゴビ砂漠の砂、そして卵型の石を手に入れました。

春、夏、秋と季節は巡り、一八三日は夢のように過ぎさり、なら・シルクロード博は無事終わったのでした。入場者数は六八一万八八三三人でした。

私は知人と閉会式会場へ向かいました。先生の閉会の挨拶も心に沁みるものでした。式辞のあと、「今日の日はさようなら」の大合唱となりました。先生も知事と一緒に歌っておられました。それが終ると、天井より色とりどりの紙吹雪が、満員の人の顔も見えぬくらいに舞い散りました。そして四千個の赤、黄、青などの風船が放たれ、奈良公園の夕空に舞いあがり、それはもうシルクロードの空まで流れていくのではないかと思うほどでした。

博覧会の期間中に、奈良で二度、岸和田で一度、シルクロードに関する講演があり、私はそれぞれ駆けつけました。

先生は生涯、旅人だったのではないでしょうか。シルクロードはもちろん、世界の川についての本もあります。日本中を取材や講演などでまわり、私の古里、宇和島に、私が中学生の頃に講演でいらっしゃっています。先生は来られる前に、その土地のことをよく調べておられます。

宇和島といえば、先生は兵庫県の西宮球場で昭和二十二（一九四七）年に行われた宇和島闘牛の遠征興行を題材に小説『闘牛』を書かれ、昭和二十五（一九五〇）年の芥川賞を受賞されました。その後、四十年あまり小説や詩をお書きになり、その作品は、日本はもとより、翻訳され世界中で読まれています。

私は「闘牛の町」に住んでいただけですが、先生は私のことを「愛読者だ」と言われたと、人づてに聞きました。この一言は私にとって至上の喜びです。『しろばんば』の映画を宇和島の映画館で見てから、いつしか半世紀以上が経ってしまいました。今はただ、本当にそれだけの歳月が流れたのかと、信じられない思いです。

世界文学としての『猟銃』

坂巻隆裕（神奈川大学非常勤講師）

正直なところ、ドイツにデニス・シェックという文芸批評家がいることは、インターネットを通じて知った。今からだいぶ前のことになるが、ドイツ語作家を思いつくままにネットで検索して、出てくるインタビュー動画などを視聴していた時期があった。そのとき、作家たちの聞き手として、眼鏡をかけた恰幅のよい男性が繰り返し登場することに気づいた。服装は一貫してスーツにカラフルなネクタイ、胸ポケットからはポケットチーフをのぞかせている。マイクを片手に作家たちに機転の利いた質問を重ねる様子は、どことなくクイズ番組の司会者のようにも見える。一体何者だろうと不思議に思っていたが、その名はデニス・シェック、一九六三年生まれ、南西ドイツ出身のれっきとした文芸批評家であることがしだいに判明していった。シェックはアメリカ現代文学の翻訳者として出発し、その後マス・メディアに活躍の場を広げ、現在はテレビの文学教養番組で司会を務めている。ドイツの文芸ジャーナリズムで最も目立つ人物の一人といってよいだろう。

そのシェックの番組で、おそらく二〇一八年ではなかったかと思うが、「シェックの本」というコーナーが始まった。古今東西の文学からシェックが選んだ百作を一作ずつコメント付きで紹介していくのである。もっぱらインターネット動画として視聴していたが、世界文学の定番あり、まったく知らない作品あり、ミステリー・SF・児童文学など、いわゆる純文学には入らない作品ありで、なかなか楽しい。その何回目かで突如、“Kopfkissenbuch”が登場したときは驚かされた。ドイツ語で“Kopfkissen”は「枕」、“Buch”は「本」だから、要するに清少納言の『枕草子』である。シェックは平安時代の化粧の仕方などを紹介しつつ、「これほど時代も文化もかけ離れているのに、彼女の声は親密に聞こえる。清少納言はモンテーニュの妹のようだ。『枕草紙』の数ページを『エセー』と入れ替えても、区別はつかないかもしれない」というような意味のことを語っていた。

こうなってくると、他にも日本文学が選ばれるのではないかと、期待したくなる。果たして、このコーナーが完結するまでに、ただ一度だけ日本人作家の作品が取り上げられた。それが井上靖の『猟銃』だったのである。

これは実のところそれほど意外な結果ではなかった。というのも井上靖はドイツで非常に高い評価を受けているからだ。例えばドイツの高級紙『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』は二〇〇七年五月四日付けで、井上靖生誕百年を機に翻訳された『本覚坊遺文』の書評を掲載しているが、作者は以下のように紹介されている。「雪の多い北海道旭川に生まれた詩人・小説家井上靖は、その一見淡白で冷静な、同時に対象を分析的に腑分けする文体によって、ドイツの多くの読者に読まれる戦後日本の作家の一人となり、そしてまたノーベル賞の歴史においてないがしろにされた大作家の一人となった」。

また手近なところでは、長らくドイツに在住してドイツ語と日本語の両方で創作を続ける多和田葉子の次のような証言もある。「たとえば夏目漱石がドイツでほとんど知られていないのに対し、井上靖の評価は高い。文学好きの知人や作家仲間はこの作家を文学的に高く評価する」（『言葉と歩く日記』岩波新書、二〇一三年）。筆者自身、かつて来日したオーストリア人作家、ゲルハルト・ロートが井上作品を称賛するのを聞いたことがあるし、ドイツ人作家、アンドレアス・セシェのアテネの書店をめぐるファンタジー小説『囀る魚』を読んで、「一九〇七年、運命が文学に好意を示した。

アストリッド・リンドグレーン、ダフネ・デュ・モーリア、井上靖が生まれ、ラドヤード・キップリングがノーベル賞を受賞し、アナトール・フランスは『聖ヨハンナの生涯』を執筆し、ジェイムズ・ジョイスは『室内楽』でデビューし、マキシム・ゴーリキーは『母』を発表した」という一節に出くわしたこともある。フィクションの中とはいえ、井上靖が世界の文豪と肩を並べているのだ（この作品には邦訳もある。酒寄進一訳『轉る魚』西村書店、二〇一六年）。そして一九六四年にオスカー・ベンルによってドイツ語に翻訳された『猟銃』は、とりわけ人気の高い作品であり、単行本として今日に至るまで版を重ねている。

しかしその一方で、日本文学の翻訳・紹介をめぐる状況もかつてとは様変りしている。きっかけとなったのはやはり村上春樹の存在である。彼の小説に関してはドイツでも賛否両論があるのだが（ちなみにシェックは称賛している）、それまでの日本文学とは比較にならない数の読者を獲得したことは間違いない。この村上の成功以降、日本の現代文学がドイツ語に訳される機会は増えており、最近では川上未映子や村田沙耶香といった若い世代の作品が翻訳され好評を博している。また日本文学の人気にマンガやアニメの影響力を指摘する声もある。さらにドイツの翻訳者たちの活躍も見逃すことはできないだろう。なかでもウルズラ・グレーフェは村上作品の翻訳を一手に引き受けていることで知られるが、すでに膨大な量の日本文学をドイツ語に訳している。村田沙耶香の『コンビニ人間』も、さらには前掲の『本覚坊遺文』も、実は彼女が翻訳を手掛けているのだ。

このような日本文学の盛況ぶりからすれば、『猟銃』以外にも選択肢はいろいろありそうな気がしてくる。「世界文学百選」にあえて児童文学・冒険小説・SF・ファンタジー・推理小説さらにはコミックスまで入れ、『源氏物語』よりも『枕草子』を採るシェックであるが、どのような理由から『猟銃』を選んだのか？　幸い、放送のもとになった原稿は書籍化されている（Denis Scheck, *Schecks Kanon: Die 100 wichtigste Werke der Weltliteratur von "Krieg und Frieden" bis "Tim und Struppi"*, Piper Verlag, München 2019）。ここではそれに拠りながらシェックの選評を紹介してみよう。

シェックは核心から語り始める。

罪・死・愛。これが時代から零れ落ちたような、奇妙に時代の影響を感じさせないこの小説の鍵となる言葉だ。井上は一九四九年に発表されたこの作品の舞台を、時代的にも地理的にも戦前・戦中・戦後の日本と具体的に定めているが、『猟銃』は人間が存在する限り常にアクチュアルで普遍的な、モラルに関する根源的な問いかけを行っている。すべては一編の詩によって始まる。

ここで、語り手が書いた散文詩『猟銃』が引用され、ストーリーの簡潔な紹介が続く。

〔詩にインスピレーションを与えた〕猟人は詩の作者に、〔自分の所有する〕何通かの手紙を送りつける。〔中略〕手紙は三人の女性が書いたもので、まるで万華鏡を回すようにそのつど出来事に新しい光を当てる。男〔猟人〕は十三年前から妻に不貞を働いている。浮気の相手は妻の友人で、離婚している。長いあいだ、彼と愛人は隠し事、抑圧された情熱、公に口にすることのできない愛とともに生きている。しかし妻は最初から夫の情事に気づいていて、それを口実に自らもアバンチュールを重ねる。彼らの結婚生活は冷えきっていき、お互いにたいする態度は冷淡になるばかりだ。この小説は愛を幸福と勘違いするという致命的な過ちを扱っているのだ。　（〔　〕内は引用者による補足）

この言葉を受けて「彩子の手紙」に記された、女学校時代の回想が引用される。英語の試験で能動態と受動態が出題されたとき、後ろの席から「貴嬢は愛することを希むや、愛されることを希むや」と書かれた紙が回ってきて、ほとんどの生徒は愛されるほうに丸をつけていた、というエピソードである。そしてシェックはコメントを次のように締めくくる。

井上靖の『猟銃』がたどり着くのは、登場人物たちが自己愛、他者への共感の欠如、エゴイズムから作り出した出口のない牢獄である。我々は孤独であり、孤独であり続ける、とこの作品は告げる。〔中略〕最後に一人の女が死ぬ。そして、無駄のない文体で語られた傑作『猟銃』を読む我々は、宇宙のマクロコスモスに劣らず、人間関係というミクロコスモスの中にも多量の冷気、真空空間、暗黒物質が存在することを予感し、慄然とするのである。

一読して明らかなように、シェックは異国情緒や異文化といった要素に惹かれて『猟銃』を「世界文学百選」に選んだわけではない。「モラルに関する根源的な問いかけを行」う普遍的な作品として、正面から受け止め、評価しているのだ。抒情的側面よりも倫理的側面に焦点を当てるのは、ドイツの批評家らしいとも言えるが、限られたスペースの中で作品の特質を手際よく伝えているのはさすがである。

前掲書の前書きでシェックは「私の見るところ、文学における真の、拠り所となる基準はただ一つだ。作品を読んで、それを機に私の世界を見る目に持続的な変化が生じれば、それは私にとっての世界文学なのである」と述べている。その言葉を信じるなら、七十年以上前に日本語で書かれた、それほど長くはないこの小説も、シェックの世界の見方を変えた作品ということになる。もとより小説の読み方は自由であるが、『猟銃』を今一度手に取って、その「世界文学」としての力を吟味してみるのも面白いだろう。

⊙井上靖記念館（旭川市）

【企画展】

○「井上靖　人と文学13　柔道」展

（～二〇二三年一月二十九日）

井上靖は旧制沼津中学で柔道を覚え、旧制第四高等学校に入学して柔道部に入ります。小説『北の海』や随筆、対談などで「練習量がすべてを決定する柔道」に打ち込んだことが語られており、三年生になると主将も務めました。

今回の企画展では、二〇二一年に寄贈された柔道関係の遺品を中心に、柔道の練習に明け暮れた四高での柔道部時代と共に、生涯続いた柔道との関わりを紹介します。

四高柔道部時代の井上靖

【特別展】

○「井上靖と萩原朔太郎（萩原朔太郎大全２０２２）」展

（～二〇二三年一月九日）

二〇二二年は詩人・萩原朔太郎の没後八十年にあたります。井上靖は「日本の詩の歴史を振り返ってみると、『月に吠える』の持っている栄光は、ちょっと比肩するものがないほど眩しい」と、萩原朔太郎を高く評価していました。

井上靖記念館では、「萩原朔太郎大全２０２２」（萩原朔太郎を介した展示を行う文学館や美術館等による同時期開催企画展）に協同し、「井上靖と萩原朔太郎」のテーマで、井上靖の残した文章とともに朔太郎の詩を紹介します。

問い合わせ：井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六―五一―一一八八

連載　井上靖未発表資料＊7

終戦前後日記 1

一九四〇年一月十六日～二月二十九日

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、別府大学教授・井上靖研究会会長の高木伸幸氏に監修をお願いして、順次紹介していくものです。

今回より紹介するのは、一九四〇年一月十六日から一九四六年四月四日までの日記帳三冊です。本資料は、その存在と簡単な内容が二〇一七年に新聞などで報道されましたが、本格的な公開はこれが初めてとなります。日記帳は、作家本人の筆跡で「終戦前後日記」と書かれた封筒に入っていました。日記には、戦時下という特殊な状況に翻弄されながらも、美術・宗教欄担当の記者として東奔西走する様子が書き留められています。

連載第七回では一九四〇年一月十六日～二月二十九日の期間を公開します。記者として多忙に過ごしながらも身辺にはいつも本があり、その旺盛な読書欲や読後の感想・批評からは、文壇デビューを虎視眈々と狙う未来の作家の姿がうかがえます。

原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字・脱字・衍字・句読点の漏れなどについては、断りなく直しました。傍点は原文通りです。

（昭和十五年）

一・十六――。一月の前半ひどく周章たゞしく過ぎてしまつた。元日には瀧さんが来て一日終る。二日は京都へ行き、三日午帰宅。三日、四日は森君を心待ちに待ち暮し、新春紙上からの〝神社日本史〟〔『大阪毎日新聞』での連載〕の原稿の下験べ、賀状の整理。五日は淡路の多賀の伊弉諾神社へ。六日は初部会。夜は森君の待ぼけ。九日は夕方からふみ〔妻〕へのサービスで竹葉と花月、後で聞くとこの夜森君来訪の由。九日は社の仕事初め、夜、森君と外通の城戸氏の御馳走になる。途中、森君中村女史を呼ぶ。かき船を出てから女史を自動車に乗せるため、新大阪ホテルの前で三十分近く立つてゐる。森君、寒気がすると言ふのでバスで別れる。十日、出勤前に山本正野さんが来て、森君急性肺炎で寝込んでゐる故、来てくれといふ。阪急宝塚線岡町の山本さんの家に森君を見舞ふ。午後、八野井君と再び訪問。夜、八野井君の家で御馳走になる。十一日、森君の見舞。本山物語〔『大阪毎日新聞』での連載〕第一回。丸野〔『サンデー毎日』時代の同僚・丸野不二男か〕より門司転勤の便り。十二日丸野来社。十三日、夜、繰さん、辻、八野井、加茂氏等で丸野歓送会、十一時の汽車で丸野門司に。十四日、翠彩社より原稿頼んで来る。本山物語の原稿書いておかねば出張出来ぬので電報で断る。十五日、明日出張の予定で、留守中の仕事のことで一日中転てこまひ。結局間に合はず一日延す。八野井君と森君の見舞、立合診察のため、北野病院の先生を連れてゆく。心配なき由。十六日、出社すると丸野門司より帰つてゐる。今夜泊つて貰ふよう約束する。間もなく家より、ふみ盲腸炎らしき電話、丸野を断り、八野井君に北野病院の坂田先生を頼んで貰ふ。直ぐ往診してくれる由、自動車で北野病院へ迎ひに行き、一緒に来て貰ふ。移動盲腸らしく入院するほどのことなき由。再び坂田先生を送り社に出る。丸野に会ひたいが会へぬ。帰宅。ふみ、熱八度、患部を氷で冷やす。

実に周章しく一月の半分が終つてしまふ。この日記を元日よりつける予定だつたが、遂に暇なし。読みたい本――アンドレ・モーロア〝英国史〟。アラン〝大

戦の思出〟本庄陸男〝石狩川〟岡崎義恵〝日本文芸の様式〟片岡良一〝近代日本の作家と作品〟。その他暇あれば岩波〝零の発見〟〔吉田洋一著〕〝学生に与ふる書〟〔天野貞祐著〕〝インフレーション〟〔木村禧八郎著か〕〝日本美の再発見〟〔ブルーノ・タウト著〕

ラファイエッド夫人〝クレーヴの奥方〟アレヴォ〔アベ・プレヴォー〕〝マノンレスコー〟ヴォルテール〝カンディド〟シオデルロス・ド・ラコス〔ピエール・ショデルロ・ド・ラクロ〕〝危険な知己〟スタンダール〝パルムの僧院〟バルザック〝ゴリオ爺さん〟フローベル〝ボヴアリイ夫人〟ゾラ〝ヂエルミナール〟モンパツサン〝女の一生〟アナトール・フランス〝神々は渇く〟――アメリカの出版社ノンサツチ・プレス社で、アンドレ・モーロア、アンドレ・ヂイド、ポール・モーラン等、著名な文学者十名にフランスの最も秀れた小説十を推薦させた結果以上の如し。改造〔総合月刊誌〕の海外文化展望より。

一・十九。昨日（十八日）朝九時半の列車で大阪発。一時頃名古屋着、直ぐ熱田神宮へ行く。宮庁で京大歴史を出た頭の余りよくなさそうな男に方々案内して貰ふ。一寸沖浦をほうふつたらしめる人だ。本町に二人で出て、精養軒でお茶をのんで別れる。直ぐ駅に行き、一時預けの荷物を取つて駅附近の二等旅館に宿泊。

外で珈琲のんで、モンテルランの〝若き娘たち〟をよみ乍ら寝て終ふ。今度旅行中に読んでやらうと思つて、ブールヂエの〝死〟モンテルラン〝若き娘たち〟〔徳田〕秋声〝仮装人物〟それから従軍看護婦の〝病院船〟〔大嶽康子著か〕の四冊を鞄につめ込んで来た。

今日、列車の中で〝若き娘たち〟を読了。面白くなし。名古屋から沿線の雪景色美しい。名古屋を発つ時は大分ひどくなりそうで、宿から駅までに真白になつたが、列車が山に入るに従つて却つて雪は少く、陽が時々、雪田の上を照らす。塩尻に降りると流石に気温はぐつと降つて寒い。雪は一寸か二寸ぐらゐ。

上諏訪へ下車、通信部へ電話をかけ、訪ねて行こうと思つてゐると、石月といふ通信員が自転車で駅まで迎ひに来てくれる。鷺の湯といふ旅館（一番よい旅館だそうだ）に案内して貰ひ、鞄をおき、写真機だけ持つて、直ぐバスで下諏訪の秋社へ行く、ネギ〔禰宜〕の人に逢つて社史をかいたパンフレット用の小冊子を貰ふ。この種のものとしてはひどく詳しいので、他の書物は必要なさそうだ。寒いので、おまけに暗くなりかゝつたので秋社だけにして、春社はやめる。

一昨年の夏、こゝを汽車で通つたが、降りた方がずつと感じがよい。諏訪湖、その向ふの雪の山（経ヶ岳、駒ヶ岳などの中央アルプスだらう）――初めて信濃らしい景色に接した。宿も、眺望は利かないが奥まつた静かな部屋、コタツが切つてあつて、お蔭で寒さは知らない。芸者が入らない唯一の旅館の由。おふみを連れて来たら嘸喜ぶだらう。明日は上社に行く、こゝへもう一泊するか否かは未定。

一・二〇　階下の部屋が騒がしいので六時に眼がさめてしまふ。昨夜遅くまで〝仮装人物〟をよんでゐたので少し寝不足だ。窓を明けると美しい。樹木のある所々だけ黒く、後は雪で一面白くなつてをり、山の表情が細大洩らさず浮き出て、苦労した男の顔の様にいかつい。湖は氷つた上に、薄く雪をおいて、これも厳しい程、冷たい眺めである。何よりも美しいのはそうした自然をバツクにして近景をなしてゐる裸木の梢だ。宿の寝具も着物もよいし、サービスも、鄭重ではないが、まあ気に入つてゐる。もう一日コタツで手紙書いたり、書物よんだりしようと思ふ。寒さはひどい。北陸の寒さとは違つて、冷たい寒さ。十時まで、森、丸野、佐藤（翠彩社）、伊豆、ふみ、大味君、森守明、熱田神宮の青年等に絵はがき短い便りを認める。十一時のバスで上社へゆく。ひどく込んで三十分程の間をずつと立つた。社務所で〝諏訪神社史〟といふ書物を貰ひ、若い禰宜の案内で写真をとる。用事では一時間たらずで終る。バスを待つ間、鳥居の前の茶店で食事。コタツに入つて肉丼、二十銭だといふので安いのに愕く。うまい漬物をどつさりくれる。広い部屋いつぱいに十幾つものコタツが切つてある。いかにも信濃の田舎らしい茶店。宿へ帰つてずつと、〝仮装人物〟、十時ごろ読み了る。もう一晩こゝに泊ることにしてよかつ

た。湖上では昼間、多勢の大人、小供入混つてスケートをしてゐる。面白そうだが、スキーなどと異つて単調で直き倦きそうだ。団体の客は、（夕方着いた）みんな別館の宴会場へゆく。こゝには芸者が入らないからだ。夜が更けて、宴会は静かになつても一人も帰つて来ない。男の求めてゐる快楽といふものをふとつまらなく考へる。どの男も〳〵同じだ。といつて一慨にけなしきれない。〝仮装人物〟で秋声が正直に怖ろしい程正直に告白してゐる。謹厳な家庭生活を持つて、晩年になつて妻君を失つてからの痴情生活を描いてある。最後まで一糸乱れぬ文章、創作態度はさすが大家だと思ふ。

一・二一　朝十時ごろの列車で甲府に向ふ。途中左側に八ツヶ岳、右手の車窓からは駒ヶ岳、観音ヶ岳等一連の南アルプスの連峯が望める。鉄道案内の荒い地図と睨めつこしながら、それらの山の名を知る。山には些かの知識もないので、それらの有名な名前をみたゞけでも、何か楽しい。山霊といふ言葉が浮かんでくる。山の斜面〳〵に薄くこく雪をおいた山のきびしい表情は、そのまゝ山のきびしい精神だ。疲れたり汚れたりした頭を休めるには中央線にのるに限る。新聞なんて読むのも惜しく、到頭、上諏訪で買つた新聞はそのまゝだ。上諏訪の駅まで石月通信員が送つてくれる。この人もやはり恵まれぬ善良な人のようだ。

列車が甲斐へ入ると、ずつと寒さが薄らぐ、雪もない。甲府の町もやはりどこか信濃に似たいい町だ。支局の池上氏が、夏は遭難の仕事ばかりですよといふ。実際、甲府を囲んでゐる山山を眺めて、山の遭難記事をかく新聞記者の居そうな町だと思ふ。バスで一時に向嶽寺に向ふ。田舎の人たちが降りたり乗つたり、揺られること約一時間。塩山からタクシーでお寺へゆくと一見まるで廃寺、住職は置手紙してお葬式に行つてゐる、帰山六時半とかいてある。塩山温泉町（町といつても落着かぬ田舎町）を通つて駅へ来る。こゝへ泊るか甲府の、支局長が電話しておいてくれた湯村のトキワホテルといふのに帰るか、さん〴〵迷ふ。遂に向嶽寺に速達を出しておいて汽車で甲府に引返す、駅前の湯村行きのバスは半時間以上遅れてもまだ来ない。それを平気で待つてゐる田舎の人たちの神経には立打ちが出来ない。バスの切符を無駄にしてタクシーで湯村に向ふ。あまり感じのよくないホテル。お湯は上諏訪の皮膚にしみるような硬さはなく、気持よい。浴槽もいゝ。だが三助〔風呂を焚いたり客の体を洗ったりする男性使用人〕にチツプをせい求されてすつかり憂欝になる。無駄な一日。しかも不快な一日だ。そろ〳〵旅がいやになる。どうにかして明日は無理をしても伊豆で、あの二階の部屋で眠りたい。

一・二十二。朝七時起床。大忙ぎで朝食をすましてタクシーで甲府八時十六分発の上りで塩山に向ふ。塩山駅よりまたタクシーで向嶽寺へゆくと坊主が一人のんびりと荒涼たる廃寺さながらの庭を掃いてゐる。取次を頼むと、その坊主が昨日手紙をかいた坊主、とにかく上つて話をきくと、管長は目下、東京、留守にはその坊主ともう一人（これは次の部屋でまだ眠つてゐる気配）しかゐない。寝てゐる方が三月前にこの寺に来て、起きてる方はまだ一月にしかならぬといふ。一切合切何も知らぬといふ。ためしに一つ二つ訊いてみるが、一向に何も知らぬ。記事はこれで断念する。やがてもう一人の坊主がもぞ〳〵起きて来て、それでも寝呆け眼でよくゐらつしやいました、この寺の焼けたのは大正十四年四月八日ですと、一日の長を示す。すると先刻からの坊主が、生半かなことは聞いても当にならない、後から確りした人にきいて書いて報せませう。と老師の如き気取つた声で、ちくりと皮肉をいふ。以て二人の坊主の仲を知るべしだ。お茶をお通し申せ、なにいつてやがんで。とお客さんを前にして喧嘩だ。あゝ、怖るべき坊主共よだ。それでも朝寝坊の方が茶と昨日のお葬式の供物らしい菓子など出す、三人で火鉢に当りながら、話す。腰を落ちつけてゐると、なにしろ管長が寺の再建運動に東京に行つてるくらゐで、こゝの僧堂は掃除人夫のゐた部屋ですからね。チエツ！　こんな破れ寺、せうがないですよ。といつた調子。早々にして退散。塀は古いものらしく、中の土に塩がまざつてゐると伝へられてるといふ。山門まで送

つてくれる。四月の十八日、さくらの満開の日、打上花火の火でこの寺はやけたとのことだ。その日の様子がふと想像される。

甲府で車、支局長に礼を言ひにゆき忙しそうだので引上げる、一時の身延鉄道で身延へ。予定は身延の仕事を二時間ほどで切上げるつもりだつたが、結局だめ。バスが十分、徒歩で事務所まで十分。通信員の案内で坊主に逢ふ。無料の開帳。それが終つてから録事に面会、十分ほど話をきゝ辞す。通信員の案内で方々引張り廻される。高野に似て居る。規模もひどくどでかい。四時四十分の列車で富士へ。富士で四十分上りを待つ。途中によほど一泊しようと思つたが結局修善寺まで出たとこ勝負でゆく。修善寺に九時着。もちろんバスなし。東海の運転手なか〳〵ゆかぬ。待合所の人に頼んで貰つてチップ一円で無理に行つてもらふ。十時湯ヶ島着。やはり来てよかつたと思ふ。みんな心待ちに待つてゐたそうだ、父〔実父・井上隼雄。退役軍医〕母〔実母・やゑ〕、はま子〔末妹・波満子〕と一時まで話す。二階の奥の間に眠る。疲れ過ぎてなか〳〵寝つかれぬ。

一・二十三。梅が咲いてゐる。が、風が出て寒し。一日、父とコタツ。午後鈴木功来りて一時間ほど。

夜、十二時までみんなで雑談。はま子、着物が一度に出来て嬉れしそうだ。こんな子供、花嫁になれるかしら。

一・二十四。朝近所へちよつと挨拶廻り、庭で写真を撮し、十時半のバスで出立。静岡の復興作業〔一月十五日の静岡大火の復興か〕の手伝にゆく奥伊豆の青年団の人たちがぎつしり積まつてゐる。みんな大陸のことを話してゐる。この中の多くの人が応召した人なのであらう。車窓からみる伊豆の暖い風景は、二三日前の信濃の景色とはひどい差異だ。古典的な暖色で統一されてゐる。汽車は静岡まで立つ。ブールジエの〝死〟を半分読む。八時半、茨木の宅へ帰る。ふみまだ床から離れられぬ様子なり。

一・二十五　昨日、丸野から端書が来て、廿四日東京発、二十五日大阪へ行くとあつたので、一日心待ちにしてゐる。井上〔吉次郎〕部長、〔橋本〕関雪の絵をみせるといつて、滝島、辻、石倉それに僕と四人を招待。僕は今日突然聞いたことだし、丸野も来るので、ふみの病気を理由にして辞退。小西さんから丸野の言伝あり。阪急ホテルに電話をかけたが、片桐氏の所へ行つて留守。退社後阪急でアキオ君にボン〳〵買つてゆく。丸野は入違ひに出て行つたらしく、まん円い顔のお父さん一人、とんびを着て部屋につゝ立つてゐる。仕方ないので一旦帰宅。九時半の汽車に見送りにゆく。東京へ行く丸野を送つてから丁度一年ほど、今度は下関へ転勤の彼を送る。こゝのところ東奔西走の形。あはたゞし。

一・二十六　支那の新政権樹立の発表があるので、家庭面は整理部へ提供。お蔭で暇なり。八野井君と森君の見舞にゆく、風強く寒し。森君大変元気、随分世話になつたのでこゝの（山本）娘を貰はんならんらしいと言つてゐる。三時まで雑談。

一・二十七　打合せ会例の如し。月給は昇つてゐない。査定し直すことになつた由。夜滝島と呑む。ビアホール、赤電気、サントリー、駅。省線へ乗つたはいゝが、とたんにぐつすり眠つてこうたり〔神足駅か〕で眼をさます。帰宅してから頭痛し。

一・二十八　快晴、久しぶりで風なく、静かな冬の日。二階から眺めると冬田が美しい。出張の写真の整理、コタツに這入つて文藝春秋を拾ひ読む。

一・二十九　喉少し痛し。首を乾いた布で巻いて社へ出る。仕事なし。理髪、西成線のガソリンカア顚覆し、それと同時に発火し、すし詰めの乗客中、百七十余名は焼死。悲惨な事件、最近とみに多し。

岡崎義恵〝日本文芸学の様式〟——今日から少しづゝ読んでゆくことにする

一・三十　立石君から電話あり、北野劇場の舞踊の

一座について来たといふ。昼訪ねてくる。半時間程ビーコンで新興〔かつて勤めていた新興キネマ社〕時代の人の話。夕方、退社后、北野劇場に訪ねてゆく。楽屋に入る。腐りかゝつたような古い社界がまだこゝに続いてゐる。忽ち何か不快になる。

立石君とサントリーバーでウイスキー、それからやはり地下の寿司屋に入る。七時に別れる。やはり芝居関係の人といふ感あり。くずれてゐる。とても親しく打込んでくるが、忽ち肩をすかされそうだ。とも角、豊台〔一九三七年秋、井上は日中戦争での従軍中に北京西南郊の豊台を行軍している〕で厄介になつた兄さんへの義理の一半を果すつもり。財政不如意だつたので繰さんに十円借りる。八野井君と弔慰会に初の申込みをする。これで満三年社員となつてから経過したわけだ。山本女史、面会——森君伊丹の家に移らうとしたが、足がふらつきまだ幾分無理らしいので当分女史の家に居る由。中村女史からも森君のことで電話あり。このところ森君の代理で忙しい。

ブールジエの〝死〟読了。死の問題を取扱つてあれど、理窟多く打たれるところ少し。死に対する考へは西洋と東洋で随分ひどい違いだ。結局、われ〳〵には斯うした西洋人の思想（宗教的）は理解できぬのだらう。生死の大事は凡夫のかゝらふべきでないといふ親鸞の言葉の持つ意味の方により多く圧倒されてしまふ。

この本にしろ、ジイドの〝未完の告白〟にしろ、モンテルランの〝若き娘たち〟にしろ、どれも、宗教的な思想にぶつかると、しら〳〵と白けて終ふ。と同様に東洋人の〝作品〟も西洋人には同様に超へられぬ一線があるのだらう。

一・三十一　立石君より電話、間もなく来社。一緒に心斎橋へタクシーで出る。立石君と打合せしておいて一人丸善へ行く。心斎橋の立石君の知人だといふおでん屋でビール少し呑んで、別れて一人社に帰る。やはり昨日同様どこか薄汚き感じなり。中村女史より朝電話、夕方社に来る。森君の所へ一緒に行つてくれといふ。東京より友達が来てゐて食事を付合はねばならんと断る。八野井君とビール呑んでから、森君を訪ねる。唐紙を開けると中村女史と山本女史と森君コタツにあたつてゐる。可笑しな風景だ。意地の達引、火花を散らして面白い。が中途からばからしくなる。九時中村女史と帰る。女史、国賊といはれる。それ以外の何物でもないような恰好してゐる。

二・一　出社すると直ぐ部長に弔慰会の借用用紙に判をおして貰ふ。三百円這入つたので少々懐が暖い。瀧さんとオーバーなしで散歩。気候も珍らしく近頃になく暖い。朝日会館で版画の展覧会をみる。新田へ行つて九十九円也の純毛の洋服を注文。帰り食事をしようと方々歩き廻るがどこも興亜奉公日〔国力増強・戦意高揚を意図して、毎月一日に禁酒禁煙・一汁一菜・飲食店休業などが義務づけられた〕で自粛休業。京都からおばあちやん〔義母・足立ヤソ〕と幾世〔長女〕来る。おばあちやん二泊して少し慣らしておいて行くことにするといふ。

二・二　ひどく寒い。宗教欄——本山物語。中村女史より電話。雪がちら〳〵する。社を退けてから繰さんにキリンビーアホールで御馳走になる。夜中に幾世おばあちやんのところへ引越し。

二・三　平川清風〔大阪毎日新聞社の常務取締役・編集主幹〕の死が報ぜられてゐる。五十歳。足立の父〔岳父・足立文太郎。解剖学者・人類学者、京都帝国大学医科大学教授〕も五十歳の時はまだ学部長になつてゐなかつたといふ。いくら幸運でも秀才でも夭折したら何もならない。兎も角平川氏の死は惜しい。大毎にとつても大きい損失だらう。僕などもやはり幹部の中での唯一人の知人を失つたので、やはりその点損失だ。辻修二、丸野みな支柱を一本なくした感じだ。併し社は平生と何等変りなし。人情紙ふうせんの如し。

植田寿蔵先生の〝芸術史の課題〟を買ふ。おばあちやん、京都へかへる。幾世泣く。よくわかつて承知してゐるくせに、おばあちやん、直ぐ帰つてくるといつてたよと頑張つて、自分をなぐさめてゐる。女史より電話。出ない。

二・四　寒し。時折晴れたり雪が落ちたり。午前中〝日本文学の様式〟十頁ほど、二階で。午後、森君のところへ見舞。往復の電車の中で中央公論にのつてゐるジヤン・ポール・サルトルといふ昨年処女作〝吐

気〃〔現在では「嘔吐」の邦題で定着〕を発表してフランス文壇に出た若い作家の〃壁〃といふ短篇をよむ。堀口大学訳。死刑宣告を受けた三人の男を描写して真に迫つてゐる。最近これほど感銘を受けた作なし。持つて廻つた心理描写はなく、てきぱきと荒いタッチで、そのくせ実に細心に死に対する恐怖もかいて完璧だ。昨日、中村女史、山本家を訪ねみなと一緒に夕食をたべて行つたといふ。山本女史の妹たちが大変でなんだ、あんな化物！　と言つてゐる由、化物には違ひなし。山本家を訪ねてゆく非常識な気持は、ちよつと嫌だが、そこにはまた彼女の可哀そうな所もあるのだろう。秋声の〃仮装人物〃の中の山田順子ほどその非常識さに美しさはない。阪急で積木を買ひ、幾世のお土産にする。今夜はおばあちやんのことをいはずに、大人しく眠る。まるで人形みたいな顔をしてコタツで眠つてゐる。

〃日本文学の様式〃少々。鑑賞論・古典論。

二・五　平川氏の告別式、阿部野のお寺へ行く。焼香者夥しい。余り人が多いので生前の氏など偲ぶ余裕なし。辻修二来てゐると許り思つてゐた木村国樹君、モーニング着て来てゐる。病気で帰され、在郷療養中の由、もう一度、近く隊へ入るといつてゐる。相変らず。戦争は一向に人間を変らせぬものらしい。おばさん帰る。明日からおふみ働くことになる。

二・六　朝から雪。記事で職業紹介所の少年部長といふ男に原稿を依頼して何か不快になる。事が大袈裟になつたためか——兎に角、こうした男には適はない。片桐君子〔作家・大庭さち子の本名〕、訪ねてくる。ビーコンでお茶を呑み乍ら話す。大衆ものには何の感激も興味のないのには吾ながら愕く。話の内容があんまり判然りと通俗的なもので埋められてゐるので辟易させられる。直木賞をとれるらしい口振り〔「妻と戦争」が一九三九年下半期直木賞候補作になっている〕。いゝ加減なものだと思ふ。

日本画展の打合会を繰さんと見学。山口、小谷〔「闘牛」の津上のモデル・小谷正一か。大阪毎日新聞社事業部所属で「日本画大博覧会」を責任者として担当〕、家永、金子、仙波。京都支局の仙波にはやり切れない。

一日を振返つて不快なこと多し。伊豆へ帰つて小説でも書いてつく〴〵暮し度し。新聞社のことを考へると、伊豆の生活の方が数等美しい。親戚のことや何かで嫌なことはあつても、そうした嫌なこともどこかまだ〳〵澄んで、静かに気持を打たせてゐられそうだ。

夜、〃日本文芸の様式〃の様式論。これで第一章だけよみ終つたわけだ。文芸の常識として持つて居るべき知識といふ意味ぐらゐなら、読んだだけはあるかも知れない。所々飛躍してゐるので妙に頼りない所がある。国文学者が、どんな仕事をしてゐるのか、今まで殆んど無智だつたので、その点では面白し。

二・七　相変らず寒さ甚し。入学試験に関するトップの記事。府の学務課長に会ふ。新興の高橋所長を思ひ出す。顔だちが似てゐる。夕食後コタツに這入り、そのまゝ寝てしまふ。一日氷雨。

二・八　晴天。仕事なく一日ぶら〳〵する。地方の通信部の記者が、凱旋した今井富士夫から言伝を持つてくる。丈夫で上等兵になつてゐた由。戦争から何かを持つてくる一番怖ろしい男の一人だらう。四時から小林君（描画さん）の帰還歓迎会、梅田ホテルでビール。いつも感ずるちぐはぐな感じ。併し本人の小林君は大変人間が変つてゐる。大変性格も磨かれて来たようだ。前の卑窟な子供らしいところがなくなつてゐる。尤も三ツ年を加へたせいもあるかも知れない。夜、〃日本文学の様式〃三十頁。今日、芥川賞の発表あり。何とか六太郎〔寒川光太郎のことか〕といふ東京の人。

二・九　生国魂神社の宮司さんの所へ記事。中川善教〔高野山の僧侶、仏教学者。後に高野山大学教授〕氏来社。場長に工場を案内して貰ふ。一分間に三千枚の新聞紙が畳まつて出てくる輪転機の前に立つてゐると少々気が変になつてくる。活字の奔流！　ビーコンで珈琲を呑んで別れると、中川氏、電車道を横切りながら茶色のズキンを冠る。それが妙に眼に泌みる。今時頭巾を冠つて大阪の街を歩く人間をみると、輪転機の前に立つた時以上、変な気がする。あゝした事が氏の生活にはやはり相当大きい

意義があるのかも知れない。

二・十、京都へ行くつもりで社へ出たが、結局、やめにする。五六人の画家に電話してみたが、折悪しく不在だつたり、病気だつたり。西山翠嶂だけが晩には戻るといふ。打合せ会、相変らず部長の雑談。ビーコンで時間を過し、五時帰宅。〔永井〕荷風の「澪東綺譚」、と薄い本で〝日本仏教発達概観〟（境野黄洋著）を買つて帰る。一旦帰宅し、昼を食べてないのでお餅で取りあへず腹を作つて、京都へ出掛ける。七時、西山翠嶂の所へ駅から電話すると帰宅してゐるといふので、直ぐ訪ねる。明るい気持よい座敷、翠嶂氏もその通り明るいいい人だ。〔菊池〕契月、関雪、〔堂本〕印象、翠嶂——と、考へてみると実に人間と座敷がよくつり合つてゐる。日本画展の審査員の言葉を訊こうとすると、まとめて原稿にしたいと言ふ。急な話で無理もないので、月曜にもう一度訪ねることに約束する。辞去しようとすると、井上さんは京都の美学をお出で〔井上は京都帝大文学部哲学科美学美術史専攻出身〕のそうですね、大変読書家といふお噂でといふ。こちらを知つてゐるので少々意外だつたし、何か直ぐ辞し去りにくゝなり半時間ほど、旅行の話、絵の話、習慣の話など。ぽつり〳〵明るい笑顔で話す。絶えず紙巻煙草を指から離さない。

九時帰宅、幾ちやん〔長女・幾世〕寝てゐる。〝日本文芸の様式〟三分の二ばかりの所で、後は中止に決める。万葉、西行、芭蕉等、岩波の文庫あたりでもう少し読んでから、改めて読んでみようと思ふ。

二・十一　紀元節、九時起床。少し腹の気持悪し、朝食後、階下でコタツに這入り、昨日買つた「日本仏教発達概観」をよみ出す。百五十頁ほどの小冊子だが、大変まとまりよく面白く書いてあるので、またゝく間に読んでしまふ。二千六百年の紀元節らしく、兎にかく仏教史一冊読んだわけだ。ふみ、午後、安藤へお正月から一度も行つてないので行つてくるといふ。幾世を歩かして一時頃出掛ける。出掛ける時は、幾世、足のシモヤケがかゆいと愚図つてゐる。前途甚だ多難を予想させる。陽気は珍らしく暖し。戸外の方が今日は気持よし。コタツに這入つて「澪東綺譚」を読み出し、夕方までにこれも読み終る。やはり面白い。所々感心させられる。秋声と違つて、文中至るところに時運に見離された不遇をかこつてゐるが、秋声より楽しそうだ。老作家の痴情小説を二篇よんだわけだが、どちらもやはり立派なものである。七時、ふみ帰る。安藤で夕食を御馳走になつてくる。お酒一本のんで、そのまゝ二時間ほど眠り眼をさます。眼が冴へ冴へとしてゐる。火鉢の火は消えてしまつたが、今夜は寒くなし。

二・十二　社へ出ず直ぐ京都、西山翠嶂氏を訪ね、約束の原稿を貰ひ、次に北野の宇田荻邨を訪ね、話の記事を取る。案外若い人で愕く。それから菊池契月、今日は玄関の上り口の間で大急行に話を訊く。四時半、社に帰る。八野井君、漢口へ従軍決定して大悦び。

夜、明日のカット諏訪神社の記事。

二・十三、また社へ一寸出て京都。雨。絵専〔京都市立絵画専門学校〕で川村曼舟と約束の三時に面会。それから五時に等持院境内を探し廻つて小野竹喬訪問、薄汚い親父。若い人と思つてゐたので意外なり。六時、等持院アパートに高安君〔京大時代からの親友・高安敬義〕を訪ねる。一昨日帰洛したと言ふ。雨の街に出て、北野で家へのお土産にあわ餅を買ひ、四條の正宗ホールでいつぱい、蛇ノ目ですし。雨ひどし。帰宅十一時。

二・十四　瀧島四面楚歌。記事がカットと画談とダブつてゐるので忙し。退社後、八野井君と、安いスキヤキ。八野井君従軍で機嫌よし。八野井君の帰国の時はたゞの井上ではないだらう。どちらが勝つか、勝負としては大変面白し。夜、カットの記事。以後絶対に家では社の仕事はせぬこと。

二・十五　退社後京都足立〔妻・ふみの実家〕へゆく。政ちやん軍属として就職の由。お祝ひに手袋を買つて贈る。大谷〔妻・ふみの末妹・千代が嫁いだ大谷敏夫家〕で三十分程、帰宅十一時半。京都学而堂より「近世作家と作品」〔一月十六日「読みたい本」に挙げていた『近代日本の作家と作品』の誤りか〕「石狩川」「戦争の思出」（アラン）。

二・十六日　宗教欄本山物語で多忙。

二・十七　白浜へゆく。朝九時出発。途中、竈山神社へ立寄る。白浜まで汽車は殆んど立通し。夜、印象訪問。平井君と部長十一時頃到着。それから二人は碁。十二時、部長一人別の宿へゆく。平井君と二時近くまでビール。

二・十八、十時、部長の宿（温泉ホテル）へゆく。二人は碁。通信員訪ねてくる。十一時印象訪問。電気館へ昼食に御馳走なりにゆく。三時半の普通列車で帰る。五時の急行を敬遠したが、それでも大変な人。途中御坊で平井君下車。今夜実家で法事の由。部長と怠窟な雑談三時間。帰宅十時。

二・十九　夜、辻平一の東京行の宴会。八野井君の壮行会も兼ねる。森君も出席。明日帰京の由。中村女史より度々電話あり。いゝ加減に相手にする。宴会の帰り、辻、八野井、森、滝島とブラヂレイロでビール。女の話。理性が勝ち過ぎてる故女に惚れんだらうと皆から言はれる。こゝ数年、恋愛について考へたことなし。と答える。ほんとだから。

二・二十二　宗教欄記事で柳沢校正部長持込みの友松円諦の原稿を部長嫌ふ。読まないでたゞ気嫌ひする。あまりいゝ原稿ではないので、自身半分持て余してゐたものだが、あまり感情的に排斥するので、反撥を感じる。よほど構はないから明日使つてやらうかと思つたが、山口君などがとめるのでやめる（部長は明日留守）。柳沢さんには内容が過激すぎるといつて断る。時々ひどく井上吉次郎といふ男が嫌になる。尤も新興の高橋といふ所長はもつと嫌だつたし。京都の岩井〔大阪毎日新聞京都支局長・岩井武俊か〕、仙波なんて連中の下で働いたらもつと堪まらないだらう。人間は復讐するために交際してるみたいなものだ。復讐を感じない周囲の人間なんかゐるかしら。このこと、もつと突きつめて考へたら、小説の素材になる！　夜、八野井、滝島、平井と少し呑む。

二・二十三　昼、忙しい最中に、伊豆の亀貝長太郎来社。一緒に難波別院まで行つて貰ふ。明日一時もう一度来る由。八野井君、明日出立といふのに、カツトの原稿、熊野三山書いてゐる。夜、芥川賞の寒川光太郎「密猟者」〔一九三九年下半期芥川賞受賞作〕をよむ。一気に面白く読ませる点は感心する。悪くすれば大衆小説になるものを兎も角芸術小説としての水準までにたかめてゐる。そうした意味では新しいといへるかも知れないが、併しやはり所々、通俗的な割り切つた観念は相当眼につく。この前の「浅草の子供」「鶏騒動」〔長谷健「あさくさの子供」、半田義之「鶏騒動」（ともに一九三九年上半期芥川賞受賞作）〕などに比べたらともかく、構成的であるし、一つのテーマに向つて、丹念に組立てゝ、苦心してゐる。自分が若しこれを書いたとしても、大して嬉れしくはないような気がする。何故か。やはり、作り物だからだ。この中には何処にも作者はいない。特異な人物の特異な気持を取扱つてゐる、あまり突飛なので一寸ついてゆけない。名人気質、芸人気質なんてものは、失敗すると通俗的に一面的になつてしまふ。成功してもこの程度だ。

芥川賞候補作金史良「光の中に」〔一九三九年下半期芥川賞候補作〕。何の奇異もない平板な文章。たゞテーマは確かに価値がある。文学的なそれではなく、社界政策的に価値がある。人物の出入れ、筋の運びは幼稚なくらゐたど〳〵しいが、素直である。やはり終ひまで大して怠窟なしに読める。この前の「浅草の子供」「鶏騒動」程度。若しこの前だつたらこれが受賞したかも知れない。

二・二十四日　九時半の汽車で八野井君を送る。午後亀貝氏来る。二人で天王寺の堂本印象の壁画見にゆく。展覧場が解らず塔へだけ上つて帰る。帰途、心斎橋を歩き、丸善で原稿用紙十帖。夕食家ですき焼。田舎の青年にしては気持よし。

二・二十五　朝九時、亀貝氏を茨木駅に送り、大阪へ出て、もう一度天王寺に行く、亀貝君、京都から急行へ乗る由。印象の仏画、たゞ美し。大変肉感的、拝

むより見惚れる。終日雨。

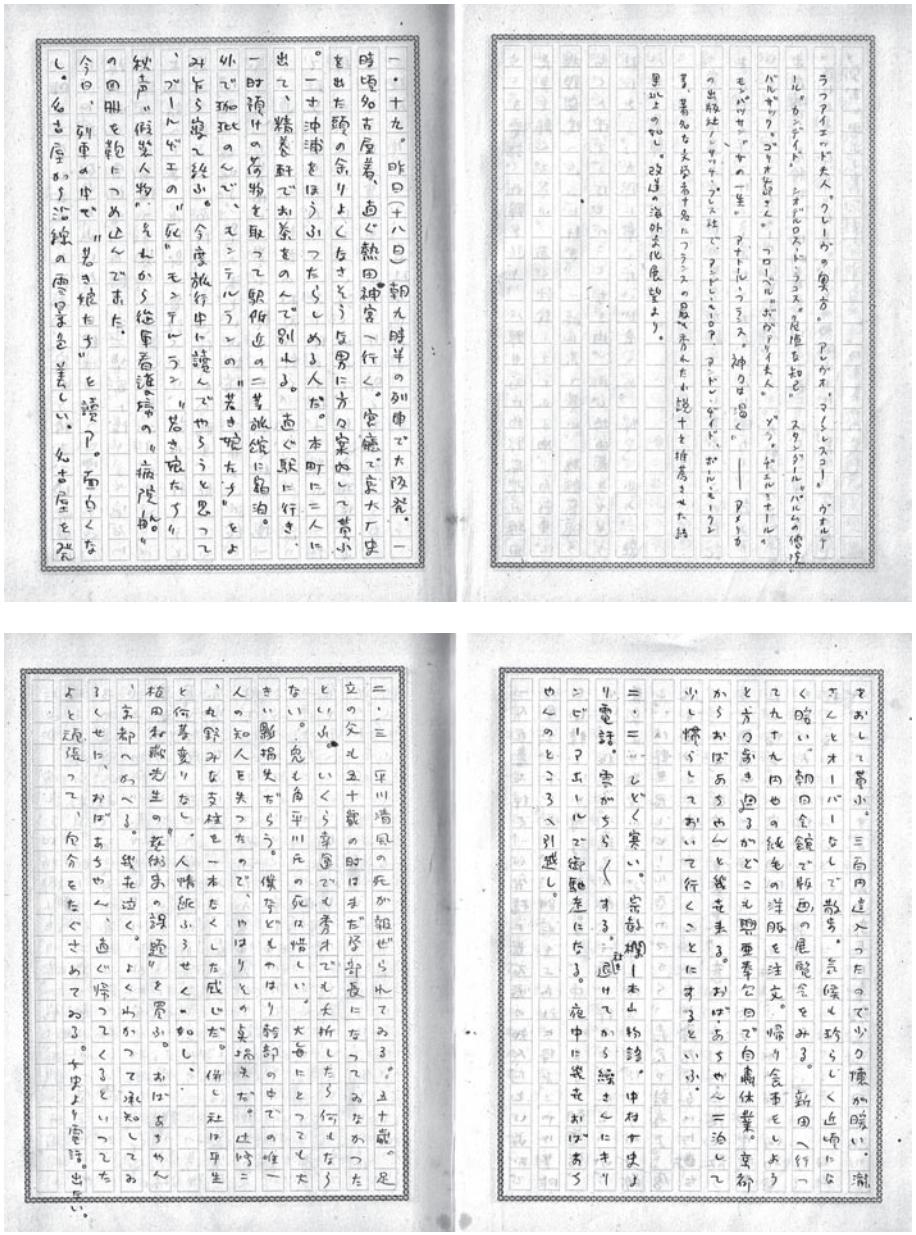
二・二十六　記事で植物園ゆく。一時間程温室をぶらつく。水を打つた許りなので、蒸気と花粉の香でむせつぽい。日曜休館なので、誰もゐず静かなり。沼津の藤井壽雄〔沼津中学時代の友人。『夏草冬濤』の藤尾のモデル〕より電話が来てゐる。夕方、今度は斎木より電話、五時半、駅の西出口で三人落合ふ約束する。

斎木は少し前から大阪へ勤めてゐる。まだ藤井と逢つてゐない。三十分程待つが来ないので、電話をなんとか商会へかけ社に来て貰ふ様にする。三人でバタ焼に行く。社会部の奴等来てゐる。嫌だので竹葉へ行く。久し振りなので愉快なり。相変らず。こちらの方が万事進んでゐるので少し話のピント合はず、併し怠窟はしない。金井〔沼津中学時代の友人・金井廣か。『夏草冬濤』の金枝のモデル〕もこの程度だらうと思ふ。二人を連れて家に来て又飲む。ボルドーの葡萄酒を開ける。水が入つてゐるのか、ひどく薄い。二時寝る。

一・二十七　斎木朝帰る。藤井歌を唄ひ乍ら洗面。相変らず苦労はなく、至極くくつたくなし。結局一時半の汽車で名古屋にゆく。十一時家を出て、街を散歩、やぐらで寿司。藤井御満悦。

二・二十八　印象の絵で五十円作る。仕事なし。

二・二十九　直ぐ京都へ行く。本山物語――東寺。雪空でひどく寒い。塔の写真二三枚写す。四時帰社。森君から病気見舞のお礼にネクタイが来る。縦縞のしやれたもの。



「終戦前後日記」①（上：『改造』からの書き抜きと1940年1月19日前半部分、下：2月1日後半部分と2日・3日）

解説

高木伸幸

井上靖は終戦前後について、それぞれ以下の期間を記した三冊の日記帳を残している。

日記①

(1)一九四〇（昭和十五）年一月十六日～五月三十日、九月二十三日

(2)一九四四（昭和十九）年一月十一日～八月二十四日

(3)一九四五（昭和二十）年一月一日～二月二十八日

日記②　一九四五年三月一日～九月三十日

日記③　一九四五年十月一日～一九四六年四月四日

いずれも毎日記述が見られるわけでなく、期間内で日付が飛び飛びになっている部分がある。①は日記専用の冊子（東京建設社発行『建設社日記　昭和十五年』）を、②と③はともに市販の大学ノートを使用している。

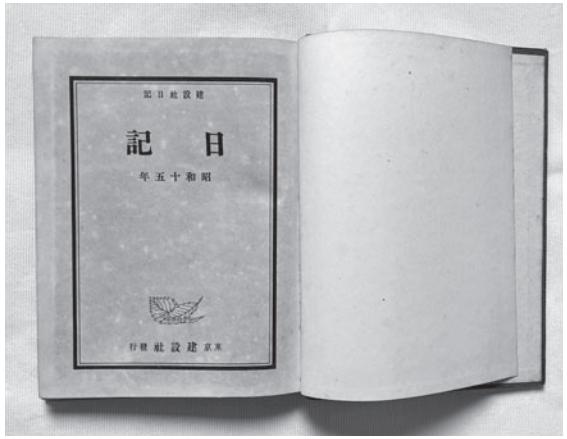
三冊とも自身のためだけに書いた、いわゆる「日記」と判断できる。日記と言っても、文学者が書いたそれには読者を想定している場合が少なからず見られる。しかし、これらの日記には、逆に他人に見せたくない本音が随所に表れている。井上靖の人と文学を理解する上で興味深い情報が数多く存しているのである。

日記①～③を順次翻刻し、『伝書鳩』誌面において公開していく予定である。今号はその初回として、日記①(1)の前半（一九四〇年一月十六日～二月二十九日）を対象としている。

掲載した日記の文面について逐次検討していきたい。

プライベートな日記であるだけに、新聞記者時代の井上靖の交友関係を知ることができる。頻繁に名前が登場する八野井君、森君は、先に発表された「井上靖中国行軍日記」（二〇〇九年十二月『新潮』）にも数多く名前が挙げられており、親しい同僚であったのだろう。二月十九日には、東京へ行く同僚の送別会を開いているが、その対象者・辻平一は毎日新聞社において出版

井上の自筆で「終戦前後日記」と書かれた封筒（左）に入って、日記3冊（右より順に①②③）が保管されていた



日記①（『建設社日記　昭和十五年』）の扉ページ

編集部長や『サンデー毎日』編集長を歴任した人物である。定年後に『文芸記者三十年』（一九五七年一月、毎日新聞社）を上梓し、記者時代の井上靖との交流にも触れている。二人は実際に親しい関係にあったわけである。二月六日に名前の見られる片桐君子は、直木

賞候補作家大庭さち子の本名。片桐は前年の『サンデー毎日』大衆文芸に入選[*1]しており、同欄の先輩作家である井上靖を訪ねてきたのだろう。片桐に対する批評は辛辣であり、当時の井上靖の文学観が表れているが、それについては後述したい。

こういった人物関係に関わる記述の中で、何より興味深いのは、当時の上司であった井上吉次郎部長に対するコメントである。

井上靖は「私の自己形成史」（一九六〇年五月～十一月『日本』）で「井上吉次郎氏が学芸部長であったとき入社したことは」「大変幸運であった」、「氏が部長でなかったら、私は宗教についても美術についても、おそらくはいまもって全く無知であったにちがいない[*2]」と感謝の念を綴り、井上吉次郎が賀寿記念出版[*3]をした際には序文を寄せていた。後年、二人は良好な関係を築いたと言える。ところが当日記を見ると、二月十八日に「部長と怠窟な雑談」をし、二月二十二日には持ち込み原稿の不掲載を巡って「ひどく井上吉次郎といふ男が嫌にな」っているのである。

井上靖は「私の自己形成史」で、右のごとく井上吉次郎に感謝しつつも、宗教欄、美術欄を受け持たされたことに関して、当初は「恨めしく思った」とも明かしている。井上吉次郎は、部下を厳しく教育する厳格な上司であったのだろう。それだけに井上靖は反撥を抱くことも少なからずあったのかもしれない。一月二十五日に「（橋本）関雪の絵をみせる」という井上吉次郎の招待を、ふみ夫人の「病気を理由」に「辞退」しているのは、そうした反撥の表れとも言える。しかし後になって、上司から受けた教育の有難さが心に少しずつ染み込んできたに違いあるまい。井上靖の人間臭い一面が垣間見えよう。

井上靖の新聞記者としての活動の概要も見えてくる。例えば日本画家の西山翠嶂、宇田荻邨、菊池契月、川村曼舟、堂本印象、小野竹喬などを頻繁に訪ね、森守明には手紙を送っている。井上靖は確かに美術記者として活躍していたのである。

繰り返し挙げられている「本山物語」というタイトルにも目を向けたい。一九四〇年一月十三日から六月十六日にかけて『大阪毎日新聞』に全十八回連載された記事を指す。無署名ながら井上靖の作品として、『井上靖エッセイ全集』第三巻（一九八四年一月、学習研究社）、『井上靖全集』第二十八巻（一九九七年十一月、新潮社）に収められている。日記の記述は井上靖が実際にその連載を担当し、力を入れて取り組んだ裏付けと言えよう。中でも一月二十一日、二十二日には「向嶽寺」の取材について記す。「荒涼たる廃寺さながら」との印象を書き、対応に出た「二人の坊主」に不快感を示している。「本山物語⑤向嶽寺―臨済宗向嶽寺派本山―」（二月二十四日『大阪毎日新聞』）には「往時の俤（おもかげ）を偲ぶにはあまりに淋しい[*4]」との一節があり、日記に残した取材時の感想がそれとなく表れているのである。

さらに日記の冒頭近くに注目したい。「（一月）四日」に「新春紙上からの〝神社日本史〟の原稿の下験べ」をしたと記す。井上靖はこれに関連して、一月五日に「淡路の多賀の伊弉諾神社」、同月十九日に「熱田神宮」、同じく十九日と二十日に「諏訪神社」、二月九日に「生国魂神社」へそれぞれ取材に出掛け、二月十七日には「竈山神社」に立ち寄ったとも書く。

一九四〇年当時の『大阪毎日新聞』を調査すると、一月九日より四月十一日まで計五十二回に亘って「神社日本史」が連載されていた。日記に挙げられていた五つの神社についても、以下の通り記事が見られる。一月十二日に「伊弉諾神社」、二月十五日、十六日、二十日にそれぞれ「諏訪神社」（上）（中）（下）、二月二十一日、二十二日にそれぞれ「竈山神社」（上）（下）、三月八日に「熱田神宮」、三月十五日に「生国魂神社」が取り上げられているのである。

「神社日本史」は千葉県や茨城県から鹿児島県まで全国各地の神社を扱っている。一人の記者による連載としては負担が大きく、多人数で分担したものと思われる。いずれも署名はなく、執筆者不明の記事であるが、井上靖も右の五つの神社について担当し、連載の手助けをしたと推察される。これら五つ（掲載回数では八回）の記事は『井上靖エッセイ全集』全十巻（一

九八三年六月〜一九八四年三月、学習研究社）、『井上全集』全二十八巻別巻一（一九九五年四月〜二〇〇〇年四月、新潮社）に該当する文章がなく、全集から漏れた井上作品の可能性が高い。特に「諏訪神社」のそれは全集未収録作と断定してよかろう。「諏訪神社（上）」は、次のように始まる。[*5]

諏訪神社上之宮に詣でようと諏訪湖岸の道に車を馳せる。冬の陽はすつかり傾き、明るい湖面を残して四囲の雪の山々がいち早く暮れかかつてゐる。

ある作家が最近この湖の表情が日に何度となく変ることを指摘してゐたが、一面凍結の二月の湖面はいま表情一つだにかへず、暮色を前にして深く静まり返つてゐる。夥しいスケートの男女もすつかり姿を消し、あるものは太古さながらの静寂と神秘の姿だ。

日記で井上靖は一月十九日に「雪の山」「諏訪湖」という「信濃らしい景色に接し」、翌二十日に「湖上では昼間、大勢の大人、小供入り混つてスケートをしてゐる」様子を見たと記す。右に見る記事の冒頭部は、それらの体験を活かした情景描写が為されているのである。特に湖面についてはスケート客の賑わいでなく、姿を消した後を描き、神社の歴史を語るにふさわしい「静寂と神秘」を強調している。井上靖らしい抒情性ある文章と捉えられるのである。

ただし「諏訪神社（下）」は、次のごとく終わる。

いま真冬の諏訪湖のほとり、古き四宮を巡り詣で、厳（おごそ）かに心馳せるのは、諏訪神社の御祭神が初めてこの地に立たせられた幽遠の神代の姿である。そしてこの湖が絶えずここに映して来た神の国日本の長く美しい歴史である。

一九四〇年は「紀元二千六百年」として政府や自治体が様々な祝賀イベントを開催し、「神国日本」を国内外に誇示した一年間であった。「神社日本史」は各神社の成り立ちを日本国の神話と絡めて紹介し、その祝賀ムードを後押しした国策記事だったのである。

ちなみに「諏訪神社（中）」は、同神社の歴史として「元寇の国難に当つての御神徳」に触れている。後に「風濤」（一九六三年八月、十月『群像』）にて元寇を取り上げた井上靖の興味の一端が表れているものの、やはり「神国日本」を強調した文面と言える。

井上靖が同時期に連載した「本山物語」にも、そうした国策的な意図は含まれていたであろう。時代の要請として当然である。しかし「本山物語」の場合は、二つの全集で確認できる通り、各宗派の歴史等を解説した文化記事の趣が強い。令和の現代においてもさしたる違和感はない。『井上靖エッセイ全集』の刊行にあたって、存命中だった井上靖が「本山物語」を採り、「神社日本史」を外したのは、単純に後者の存在を忘れただけかもしれないが、国策的な内容において意に適った記事でなかった故とも言えそうである。

最後に読書関連の記述について。

一月十六日に「読みたい本」を列挙するなど、その読書量の多さには驚かされる。これらの読書を通して、作家・井上靖の土台が形成されていったのだろう。

読み上げた作品として、海外作家の小説ではモンテルラン「若き娘たち」、ジイド「未完の告白」、ブールジェ「死」、サルトル「壁」、日本作家の小説では徳田秋声「仮装人物」、永井荷風「墨東綺譚」、寒川光太郎「密猟者」、さらに在日朝鮮人作家・金史良の「光の中」や国文学者・岡崎義恵の大著「日本文芸の様式」などが挙げられ、それぞれ感想も記されている。

大部分が今日では古典と言い得る名作であるが、当時はこれら全てが発表から間もない同時代の作品であった。寒川の「密猟者」は最新（一九三九年下半期）の芥川賞作、金の「光の中」は同じ芥川賞の候補作であった。サルトル「壁」は堀口大学の訳で『中央公論』一九四〇年新年号に掲載され、その直後に井上靖は読んだことになる。その他もここ数年の間に初版が出たものばかりで、最も刊行が古いジイド『未完の告白』（堀口大学訳、第一書房）でも一九三六年九月の初[*6]

版発行である。井上靖は文学界の新たな動向に注目し、いち早く吸収しようと心掛けていたのである。

サルトル「壁」については「死刑宣告を受けた三人の男を描写して真に迫ってゐる。最近これほど感銘を受けた作なし。持つて廻つた心理描写はなく、てきぱきと荒いタッチで、そのくせ実に細心に死に対する恐怖もかいて完璧だ」と絶賛している。サルトルがノーベル文学賞に推されて辞退するのは一九六四年。それよりおよそ二十四年前の時点でかくのごとく評価した井上靖の慧眼に注意されたい。「壁」の主題と要旨を簡潔に捉えた紹介文とも言い得るこの文面は、井上靖の鋭い読解力をも表していよう。

当時既に大家の地位にあった徳田秋声と永井荷風の作品も高く評価している。どちらも私小説的な作風であり、井上靖も「怖ろしい程正直に告白」した小説と解釈している。対して寒川光太郎「密猟者」には「面白く読ませる点は感心」だとしつつも、「通俗的な割り切つた観念は相当眼につく」とやや否定的である。併せて二月六日の日記に戻ると、井上靖は片桐君子との面会を巡って「大衆ものには何の感激も興味のないのには吾ながら愕く」と記していた。

周知のごとく井上靖は大阪毎日新聞社[*7]に就職以前、つまり当日記より約四年前まで、時代物「流転」で千葉亀雄賞を獲得するなど大衆小説に多く筆を染めていた。しかし一九四〇年の時点では、大衆文芸と距離を置き、本格的な文芸作品を志向していた。そのことが、これら日記の文面に表れていよう。

モンテルラン、ブールジエ、ジイドの三作には、「西洋人の思想」「宗教的な思想」に対する理解し難さを示し、「生死の大事は凡夫のかゝらふべきでないといふ親鸞の言葉」と対比させ、西洋人と東洋人の間に画された一線を感じている。クリスチャンではなかった井上靖の率直な心情であり、東洋的な思想（仏教）に親近感を見出しているようにも見える。「本山物語」や「神社日本史」の執筆から東洋思想に好意的になった側面もあろう。

井上靖は特定の宗教に依拠した作家では決してなかった。代表作の一つである「天平の甍」（一九五七年三月～八月『中央公論』）も決して宗教小説でなく、仏教に携わった留学僧や鑒真の生きざまを描いている。ただ、その上でキリスト教よりも仏教に魅かれ、親しみを持っていたのであろう。井上靖は風邪のために結局受験を断念したが、一九四三年に高野山の末寺の僧侶の試験を受けようとしていた。[*8] 日記の記述はそれより約三年早く、そうした宗教的、思想的な嗜好の萌芽とも見做せるのである。

ふみ夫人や長女幾世を思い遣り、お世話になった人々へ小まめに手紙を送るなど、他にも井上靖の様々な素顔を知ることができる。貴重な資料として、大いに参照されたい。

＊1　大庭さち子は「妻と戦争」で第二十五回『サンデー毎日』大衆文芸に入選。同作で一九三九年下半期直木賞の候補にものぼった。

＊2　引用は『井上靖全集』第二十三巻（一九九七年六月、新潮社）に拠った。

＊3　井上吉次郎『通信と対話と独語と』（一九六九年五月、井上吉次郎博士喜寿記念出版刊行会）。

＊4　引用は一九四〇年二月二十四日『大阪毎日新聞』初出本文を参照の上、『井上靖全集』第二十八巻（一九九七年十一月、新潮社）に拠った。

＊5　紙面本文は句点のみで読点を用いていないため、引用文では読点を補っている。旧字体は新字体に改め、振り仮名は適宜省いた。新聞からの引用文は以下同じ。

＊6　永井荷風『濹東綺譚』（岩波書店）は一九三七年八月、徳田秋声『仮装人物』（中央公論社）は一九三八年十二月、モンテルラン『若き娘たち』（新庄嘉章訳、新潮社）は一九三九年六月、ブールジエ『死』（廣瀬哲士訳、東京堂）と岡崎義恵『日本文芸の様式』（岩波書店）は一九三九年九月にそれぞれ初版が刊行。

＊7　現『毎日新聞』は一九四二年十二月まで『大阪毎日新聞』、『東京日日新聞』に分けて発行。一九四三年一月より『毎日新聞』に統一。井上靖は一九三六年八月、統一後は毎日新聞大阪本社となる「大阪毎日新聞社」に入社した。藤澤全『若き日の井上靖研究』（一九九三年十二月、三省堂）参照。

＊8　藤澤全『若き日の井上靖研究』（＊7前出）参照。

三十年ごしの観音様

井上方良（井上靖孫）

令和三年の夏、私は東海道新幹線に乗り、西日本へ向かっていた。目的地は滋賀県。古い友人に誘われ、琵琶湖のほとりにある有名な日本料理屋で旧友達と集うことになったのだ。急な誘いではあったが、大事な友人でもあったため、宿の予約をとり、久しぶりに遠方へ足を運ぶことになった。

ただこの旅にはもう一つ目的があった。琵琶湖北東部にある渡岸寺観音堂の十一面観音立像を訪れることだ。祖父井上靖の小説『星と祭』の中にこの観音立像は登場する。琵琶湖での事故で行方不明となった娘への喪失感を、湖周辺に散在する観音立像を巡ることで埋めていく主人公の姿が描かれている。

その中でも代表的存在である渡岸寺の観音立像を見に行こうとしたのだが、私にとっては実は今回が初めての訪問ではない。三十年以上も前になるが、祖父・祖母と一緒にこの地を訪れたことがあった。滋賀県での講演を頼まれた祖父は、祖母とともに東京から出向くことになったのだが、高齢の二人には付き添いが必要で、私と母が帯同することになったのだ。まだ小学生であった私は何もできないただのお伴であったが、最初で最後の祖父母との旅になった。

幼い私にとっては渡岸寺観音堂が何なのかは全くわからず、「渡岸寺さん」というところに有名な観音様がいるらしいぐらいの知識しかなかった。ただ、祖父の小説によりその観音像が世に大きく知られることになったため、大勢の前で講演を頼まれたということだけが当時の私が理解しえたことだった。

だが、この旅で私の記憶に強く残ったのは渡岸寺でも観音立像でもなかった。私にとって衝撃的だったのは、祖父がいかに世の中で名が知られた小説家かを目の当たりにしたことだった。行きの道中、プラットフォームで新幹線を待っていると、祖父は瞬く間に多くのファンに囲まれ写真やサインをせがまれた。この状況は東京を離れても変わらず、滋賀県を車で移動している時も、休憩所に立ち寄ればまたすぐに「井上先生でいらっしゃいますか」と声をかけられ、取り囲まれてしまうのだった。

また、講演後に地元の市の幹部の方々と夕食をとるため現地の料亭に招待され、三十畳はあるかという大広間で夕食をとったことも鮮明に覚えている。そもそも料亭という場所に馴染みのない私は、祖父はこんな場所に招待される人間なのかと驚きながらも、贅沢な夕食を楽しんだことは懐かしい思い出である。

それまで、私にとっての祖父は、「怒らせたら怖いおじいちゃん」であったが、この旅を通じて、「小説家・井上靖」なのだということを強く認識させられた。ただ、著名人であるということは、個人の旅の道中であっても、どこでもファンに囲まれてしまうなかなか窮屈で大変なものなのだと子供ながらに思った。

それから三十年余。その間、渡岸寺観音堂を訪れる機会は全くなく月日が経ってしまったのだが、友人の誘いがよいきっかけとなり、現地へ足を運べることになった。友と二人、新幹線から北陸本線に乗り換え、目的地の高月駅へ向かった。七月も後半にさしかかり、気温は三十度をはるかに超えていた。雲一つない快晴に恵まれ、北上する列車の窓からは西に琵琶湖、東に伊吹山を見わたすことができた。二十分ほど列車からの眺めを楽しむと高月駅に到着した。湿度の高い夏の暑さを感じながら駅構内を歩くと、壁には祖父と観音像を一緒に紹介するポスターがいくつも貼られており、この地域で今も井上靖の存在が観音像とともに大きいのだと実感した。

駅から一歩外に出ると、夏の日差しに青々と光る美

渡岸寺観音堂とその境内にある文学碑
（文学碑は祖父在世中の1982年に作られた）

しい水田が私達を出迎えてくれた。その脇の水路には美しく澄んだ水がゆっくりと流れていた。歩き始めると汗がすぐに額からにじんできたが、我々以外には車も歩行者もいない静かな街並みには、水の流れる音だけが響き、真夏の暑さを和らげてくれた。

そんな美しい自然に囲まれた湖畔の街並を十分ほど歩くと、水車が現われ、その奥が渡岸寺観音堂だった。訪問者も少なく、閑散とした境内に歩を進めほどなくすると、蝉の声につつまれてひっそりとたたずむ祖父の碑があった。「慈眼　秋風　湖北の寺」と刻まれている。一目で懐かしい祖父の文字とわかり、世田谷の自宅の仕事場で週末も机に向かう祖父の後ろ姿が目に浮かんできた。

本堂からさらに奥へ向かい、目的地の観音堂にたどり着いた。薄暗いお堂の中にたたずむ十一面観音立像――。その表情は慈愛に満ち、静かな笑みをたたえているように見えた。立像は非常に柔らかな曲線で構成され、像全体の美しさを際立たせている。よくみると腕が非常に長いにもかかわらず、なぜか全体のバランスは崩れず、絶妙なしなやかさを生み出している。薄暗い観音堂の中は、その静かな美しさで満たされているように感じられた。

恥ずかしながら小学生時代の観音立像の記憶はほとんど残っていない。今回が初めて立像をしっかりと認識する機会だった。この十年ほど、海外の著名な美術館、教会を訪れる機会が数多くあり、西洋の宗教像や彫刻に触れることが度々あったのだが、観音像からはそれら西洋の像とは大きく異なる美しさを感じた。欧州で見た像には、荘厳かつ重厚な美しさがあり、人々から神として崇め奉られる、人間とは距離をおいた崇高さを表しているように感じた。しかし、観音立像は、見るものを包み込むような柔和な美しさをたたえ、人々から崇められるというより、救いを求める人々のところへ降り、寄りそうような雰囲気を放っていた。

薄暗い観音堂の中で時を忘れ、ただただその美しい立像を眺めた後、外に出ると、真夏の日差しがそそぐ別世界が待っていた。蝉の声が降る境内をゆっくりと入口まで戻ると、静かな御堂で観音立像と過ごしたのが、遠い昔の出来事であったかのような不思議な感覚におそわれた。御堂の中にいた時間は三十分ほどだったはずだが、何かとても長い時間を過ごしたような気がしてくる。ひょっとしたら何百年もの時を重ねてきた観音立像の長い歴史の時間を、少し分けてもらったのかもしれない。

戦火を幾度も乗り越え、人々の思いと祈りがつまった立像には、今の世界はどう見えているのだろうか。そして、祖父はこの立像と対峙した時、何を思ったのだろうか。

そんな問いかけに答えてくれる祖父は、残念ながらもういない。だが、三十余年という、立像の長い歴史からすれば一瞬かもしれないが、私にとってはとても長い時を経て、ようやく祖父との古い思い出に出会わせてもらえたのは大きな喜びであった。貴重な経験をくださった観音立像には、心から感謝をしなくてはいけない。

今度ここに来る時は、娘達にもこの立像を見てもらいたい。彼女達も昔の私のように、立像ではなく道中の食事ぐらいしか記憶に残らないのだろうか。ただそれでも、祖父と深い縁のあるこの美しい立像を、一目でも眺めてほしい。そう思いながら境内を後にし、駅への道を急いだ。

令和三年度

事業報告

井上靖記念文化財団事務局

本財団と旭川市の間に締結された「井上靖記念事業の実施に関する協定」により、日本文化の振興及び発展に寄与するために協力して井上靖記念事業を実施いたしました。令和三年度も旭川市の「井上靖記念事業実行委員会」の全面的な協力を得て諸々の文化事業を実施・運営する予定でしたが、令和二年一月から始まった新型コロナウイルスの感染拡大が令和三年度まで続き、事業計画の中止や延期を余儀なくされることが多く、今年度もまた誠に残念な一年間でした。

（一）文化賞授与事業

第五回井上靖記念文化賞は、令和二年十一月二日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の推薦を募集し、二十件の推薦が集まりました。前年度の選考から繰り越された七件の候補を合わせて二十七件が第五回の受賞候補者となりました。令和三年二月二十日に東京都内にて栗原小巻、川村湊、古家昌伸、酒井忠康、辻原登の諸氏による選考委員会を開催し、受賞者を決定する予定でしたが、こちらも感染拡大防止で延期を余儀なくされ、令和三年七月十日に開催された選考委員会において、バレエダンサーでKバレエカンパニー芸術監督の熊川哲也氏を井上靖記念文化賞に、㈱藤原書店代表取締役社長の藤原良雄氏を特別賞に決定いたしました。

受賞理由は、熊川氏が「日本人初のローザンヌ国際バレエコンクール金賞受賞後のプリンシパルとしての国際的な華々しい活躍、Kバレエカンパニーの設立など、精力的な公演活動や後進の指導を続けている業績」に対して、藤原氏が「藤原書店を率い、フェルナン・ブローデルの大著『地中海』をはじめ、フランス現代思想の翻訳出版を精力的に行うほか、『石牟礼道子全集・不知火』、宇梶静江の自伝『大地よ！』等を出版し多大な反響を呼ぶ」との評価によります。

贈呈式は、令和四年二月十三日、旭川市において開催しましたが、新型コロナウイルスの感染予防のため、熊川氏は事前に作成いただいたビデオメッセージの上映、藤原氏はオンラインで参加いただく形式で、お二方ともご来場いただかずに実施しました。また、予定しておりました選考委員ならびに財団関係者を含めた市外からの参加者全てをお断りしたため、代替措置として贈呈式の様子を御覧いただけるよう、一部を動画にして YouTube で公開しました。

また後日、本財団前理事長が旭川市の方々とともに令和四年三月二日に熊川哲也氏（井上靖記念文化賞受賞）と藤原良雄氏（同特別賞受賞）の事務所を訪問し、賞状・記念品・副賞をお届けしました。

（二）国内外における日本文化の研究助成

○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』への刊行助成を行うとともに、同会のホームページ管理にも助成を行いました。

また井上靖研究会の夏季研究会・冬季研究会は新型コロナウイルス感染防止のため中止となりました。なお令和三年七月に機関誌『井上靖研究』第二十号を刊行しました。

井上靖文学の研究者で別府大学教授の高木伸幸氏著の新刊『井上靖の文学――一途で烈しい生の探求』の出版事業に対する助成を行いました。

○オーストラリア・ニュージーランド

平成十八年度に、オーストラリアにおける日本文学の研究奨励のため、シドニー大学に設立した「井上靖賞」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため令和

三年度も活動を中止いたしました。

○ベトナム

平成二十七年度に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で開始した「井上靖賞・日本文学研究論文コンテスト」は、令和三年度に第五回の募集・選考・贈賞を行い、当該事業の実施に係る助成を行いました。

本賞は研究者・一般部門と学生部門の二つに分かれており、今年度は研究者・一般部門で三名が受賞し、よしもとばななの小説をテーマとしたグエン・ティ・フィン・チャン氏（ゲスグリーン教育システム）が一位に、学生部門も三名の受賞者で、カズオ・イシグロの小説をテーマとしたレー・ミン・コイ氏（ホーチミン師範大学・文学部四年生）が一位でした。なお、今年度の研究者・一般部門は、二位が二名、三位はなしとなっております。

授賞式は、ベトナムもコロナ禍で、令和四年二月二十六日にオンラインで実施されました。

研究者・一般部門

第一位　Nguyen Thi Huynh Trang（ゲスグリーン教育システム）（写真①）

“The works of Yoshimoto Banana from the perspective of kawaii aesthetic”

第二位　Le Thi Diem Hang（フエ大学師範大学）

“Research on myths in the novels of Yasunari Kawabata and Haruki Murakami from a comparative perspective”

「井上靖賞」の受賞者
（研究者・一般部門の第２位の Le Thi Diem Hang 氏は欠席）

第二位　Do Thi Mai（ハノイ人文社会科学大学）（写真②）

“Characteristics of modern Japanese literature: Change of writing style and interference with “Haikai””

学生部門

第一位　Le Minh Khoi（ホーチミン師範大学）（写真③）

“The Matter of Identity in Kazuo Ishiguro’s novels”

第二位　Trinh Kieu Trang（ハノイ人文社会科学大学）（写真④）

“The Phenomenon of parallel adaptation of literary works-Anime in Japan（Case study: The Tale of the Princess Kaguya and 5 Centimeters Per Second）”

第三位　Duong Thi Ut Giau（ハノイ人文社会科学大学）（写真⑤）

“The Character Word in Watanabe Junichi’s novel “The Lamp Without Shadows” from a psychoanalytic perspective”

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○本財団ホームページ

更新・管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和三年七月十五日、『旭川市井上靖記念館報』第二十一号の発行に協賛しました。

常設展示の他に、左記のような企画展四回を本財団と共催で開催しました。

「井上靖　蔵書展Ⅲ――日本及び中国・西域の史料」展（令和三年六月二十一日～十月二十四日）

「井上靖の旅Ⅱ　海外編」展（令和三年十月三十日～令和四年一月三十日）

「井上靖　人と文学Ⅻ――『わが母の記』を巡って」展（令和四年二月五日～五月二十二日）

特別展示「3・11 文学館からのメッセージ　井上靖の『小磐梯』――災害とその後世」（令和四年三月一日～三月三十一日）

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○長泉町井上靖文学館

常設展示の他に、以下の企画展を本財団の後援で開催しました。

リニューアルオープン企画展「井上靖没後三十年　美をめぐる物語」（令和三年七月十七日～令和四年三月八日）

講演会「娘がみた父・井上靖」講師・黒田佳子氏（令和三年十一月二十日、コミュニティーながいずみ）

（四）近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行う他、井上靖の資料収集・調査研究を行っている当財団機関誌『伝書鳩』第二十二号を十二月に発行しました。

（五）講演会などの開催事業

○青少年エッセーコンクール

旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で第十回「井上靖記念館　青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象に実施されました。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館理事長）、赤木国香（北海道新聞社文化部長）の両氏です。今年度の募集テーマは「間」で、応募総数三七七編の中から中学の部六作品、高校の部六作品を入賞に決定しました。コロナ禍での表彰式は出席者の人数を制限し、上位入賞者のみを招待して令和三年十二月十二日に井上靖記念館で開催されました。

最優秀賞

中学校の部：鎌田真衣佳「『間』の違い」（筑波大学附属中学校三年）

高校の部：満山志帆「父の間」（福島県立葵高等学校二年）

優秀賞

中学校の部：上條隼「餃子の調和」（早稲田大学高等学院中学部一年）・鹿住結和「『すきまど』から見える幸せ」（白百合学園中学校一年）

高校の部：菊池馨「邂逅」（宮城県仙台二華高等学校一年）・高野知宙「音楽の間、心の『間』」（渋谷教育学園渋谷高等学校二年）

佳作

中学校の部：新屋太洋「言葉と言葉の間」（沖縄県立開邦中学校三年）・堀川莉里「『間』と私たちの関係」（白百合学園中学校三年）

高校の部：児玉駿「共有した時間と空間」（宮崎県立延岡星雲高等学校二年）・山田好海「唯一無二の存在」（クラーク記念国際高等学校深川キャンパス二年）

井上靖ナナカマドの会賞

中学校の部：上田百恵「ゼロ距離」（旭川市立緑が丘中学校二年）

高校の部：庄司光愛「だんご四姉妹」（北海道旭川永嶺高等学校二年）

○あすなろ忌

例年一月二十九日の井上靖の命日に近い日曜日に、伊豆市湯ヶ島町の熊の山墓地と天城会館劇場ホールで、伊豆市・伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、長泉町井上靖文学館・本財団等の後援で実施しておりました「あすなろ忌」（井上靖追悼事業）は、墓参と「井上靖（感想文・感想画）コンクール」の表彰式、椎名誠氏による講演会等を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。

なお、「井上靖コンクール」の発表・表彰式は中止となりましたが、令和三年度は五八一作品の応募から次の十一作品が入賞しました。

読書感想文

最優秀賞

小学校の部：青木萌々香「郷土を大切にする心」（中伊豆小学校六年）

中学校の部：鬼崎耀晴「洪作から学ぶ受験」（筑波大学付属中学校三年）

優秀賞
小学校の部：芹澤暁之介「しろばんばとげき」（修善寺南小学校六年）
中学校の部：寺本有沙「夏草冬濤の持つ力」（筑波大学付属中学校二年）
感想画・風景画
最優秀賞
小学校の部：小出勇太「夕焼けの上の家」（中伊豆小学校六年）
中学校の部：後藤美柚里「弘道寺」（天城中学校二年）
高校の部：佐久間楓「想い出の地を散策」（三島学園知徳高校一年）
優秀賞
小学校の部：芹澤暁之介「さようなら、おぬいばあちゃん」（修善寺南小学校六年）
佳作
小学校の部：渡邉朋香「歴史ある神社の木」（中伊豆小学校六年）、杉本優芽羽「井上靖の原点」（中伊豆小学校六年）
ふるさと賞
小学校の部：福井真那斗「おぬいばあさんのカレー」（修善寺南小学校四年）

また、伊豆市の天城湯ヶ島町民劇団「しろばんば」の演劇公演も開催されず、本年度における助成は実施されませんでした。

（六）特定寄附事業

令和三年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催し等がありました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和三年五月五日、「井上靖生誕日記念事業　無料開館・ミニコンサート」演奏・フルール（フルートアンサンブル）

令和三年七月十八日、「日曜午後の朗読会」（『風』）朗読・塩尻曜子氏（井上靖ナナカマドの会会員）

令和三年十月九日、文学講座「『星と祭』と〝救い〟の形――もう一つの星・十一面観音・祀り・祈り」講師・石本裕之氏（国立旭川工業高等専門学校教授）

令和四年一月二十九日、「あすなろ忌コンサート」演奏・高瀬喜朗氏（マンドリン）、安田敏宏氏（ギター）

令和四年三月二十六日、文学講座「原民喜の戦後――草野心平発　長光太宛の手紙から」講師・平原一良氏（北海道文学館理事長）

○福井県ふるさと文学館

令和三年五月二十八日～六月十三日、「新収蔵品展」井上靖の山本和夫氏宛書簡と写真の展示

○石川近代文学館

令和三年四月二十四日～八月十五日、「北辰の青春赤レンガ校舎で学んだ作家たち」青春時代を四高で過ごした井上靖など十人の文学者を紹介する企画展

令和三年五月八日、「井上靖顕彰朗読会」（「北の海」（抄）、随筆「青春を賭ける一つの情熱」）朗読・茶谷幸也氏

令和四年二月十九日、朗読会「あすなろ物語」朗読・所村佳子氏

例年、五月六日に行われる「鑑真まつり」は、コロナ禍のため、記念のお菓子を来館者に配るという形に変更。

○井上靖ナナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）

令和三年八月二十五日、『赤い実の洋燈（ランプ）』五十七号発行

○よねざわ市民ギャラリー（米沢市）

令和三年十月十日～三十一日、「秋山庄太郎　文士と芸術家のポートレート展」井上靖のポートレート・色紙「正確なものだけが美しく見える」の展示

○世田谷文学館
令和三年十月十六日～令和四年三月三十一日、世田谷文学館二十五周年記念「セタブン大コレクション展PART1　ふかくこの生を愛すべし」井上靖の肖像写真、井上靖の山本健吉氏宛書簡の展示

○伊豆市観光協会天城支部
令和三年十一月二十三日、井上靖の母方の実家「上の家」の改修完了のお披露目会（十二月四日から一般公開）

○高志の国文学館（富山市）
令和四年一月十六日～三月二十一日、企画展「個性きらめく富山の女性作家たち展」井上靖の高松翠宛封書の展示

○伊豆市湯ヶ島の熊野山墓地
令和四年一月二十九日、井上靖命日の墓参りにオンラインで連携
「あすなろ忌」がコロナ禍で二年連続中止になったため、長泉町井上文学館の徳山加陽氏が中心となって企画。熊野山の墓前には宇田治良会長をはじめとするふるさと会の方々に井上家の黒田佳子氏が加わり、線香を手向け墓参した。オンラインでは徳山加陽氏、日本現代詩歌文学館の濱田日向子氏、佐久間図書館（浜松市）の長谷川陽子氏、大黒屋光太夫記念館の代田美里氏、『『星と祭』復刊プロジェクト」の久保寺容子氏ほか二名、浦城幾世氏、井上修一夫妻が参加。

○福島市写真美術館
令和四年三月十九日～四月十七日、「秋山庄太郎展2022　いちごいちえ」井上靖のポートレートの展示

（八）役員

令和三年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々でした。

理事長　井上修一
専務理事　浦城幾世
理事　浦城義明　岡崎正隆　狩野伸洋　黒蕨真一
　佐藤純子　勝呂　奏
監事　高田敏和
評議員　井上敦夫　井上卓也　相賀昌宏　表　憲章
　小西千寿　篠　弘　三木啓史　山口　建
（五十音順）

なお令和四年度六月開催の第一回評議員会と臨時理事会で次のような人事が承認されました。ご支援のほど、よろしくお願い申しあげます。

理事長　浦城義明
専務理事　井上敦夫
理事　井上修一　岡崎正隆　狩野伸洋　黒蕨真一
　佐藤純子　勝呂　奏
監事　高田敏和
評議員　井上卓也　浦城幾世　相賀昌宏　表　憲章
　小西千寿　篠　弘　三木啓史　山口　建
（五十音順）

また令和元年度に、旭川市より理事をお引き受け下さいました黒蕨真一氏が令和四年十月にご都合によりご退任になられました。ご指導ご鞭撻をいただき、誠にありがとうございました。代わりに旭川市教育委員会の新教育長、野崎幸宏氏が十一月末の書面による臨時評議員会で理事に選任されました。よろしくお願いいたします。

令和三年度の事業を協力して実施していただいております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々です。

委員長
黒蕨真一（旭川市教育委員会教育長）
副委員長
十河宣洋（NPO法人・旭川文学資料友の会会長）
児玉真史（北海道新聞旭川支社長）
委員
荒川美智（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川

市井上靖記念館長）
高田敏和（旭川市教育委員会社会教育部長）
監事
三原一仁（ＮＰＯ法人・旭川文学資料友の会理事、旭川文学資料館長）
那須かおり（北海道新聞旭川支社事業担当）

（九）住所・連絡先

一般財団法人　井上靖記念文化財団
〒一五六―〇〇五三
東京都世田谷区桜三丁目五番九号
電話・ＦＡＸ：〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会　事務局
〒〇七〇―〇〇三六
旭川市六条通八丁目　セントラル旭川ビル七階
旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内
電　話：〇一六六―二五―七五五八
ＦＡＸ：〇一六六―二五―八二一〇

⊙『井上靖研究』第21号　目次紹介

論文
勝倉壽一「大黒屋光太夫の処遇――井上靖「おろしや国酔夢譚」の「半幽囚」記述をめぐって」
劉慧子「井上靖「姨捨」論――〈遁世の血〉との対抗」
趙建萍「小説『漆胡樽』に見られる文明東漸思想からの影響」
小田島本有「二つの〈引退小説〉――井上靖『花壇』と渡辺淳一『孤舟』」
西座理恵「井上靖の作品における「神かくし」と「山」――柳田國男の研究を視野に」

エッセイ
小関一彰「『天平の甍』と遣唐使留学生の青春」

新刊紹介
重里徹也「高木伸幸著『井上靖の文学　一途で烈しい生の探求』」

⊙長泉町井上靖文学館

【企画展】
○「歴史へのとびら――北条・徳川ゆかりの人々」展
（～二〇二三年三月十四日）

井上靖は大河ドラマの原作にもなった『風林火山』をはじめ、日本の歴史を題材にした多数の小説を発表しています。

二〇二二年の大河ドラマは北条義時、二〇二三年は徳川家康と、静岡県ゆかりの人物を主人公にした物語が続き、地域での関心も高まっています。本企画展では、北条・徳川に関連させて、井上靖が描いた歴史小説の世界と、その魅力を紹介します。

問い合わせ：長泉町井上靖文学館
静岡県駿東郡長泉町東野五一五―一四九
☎〇五五―九八六―一七七一

井上靖と「上の家」
（写真提供：長泉町井上靖文学館）

⊙「上の家」と「しろばんばの里公園」

井上靖の母の実家「上（かみ）の家」は、伊豆市観光協会天城支部と井上靖ふるさと会の取り組みによって改修がなり、二〇二一年末より一般公開が始まりました。

続いて二〇二二年夏には「上の家」横の旧営林署跡地に「しろばんばの里公園」が完成いたしました。地元住民の方々のご協力によって芝生が張られ、東屋やベンチなどが設置され、皆様の憩いの場となっています。

公園名は公募から選ばれ、その名を刻んだ園名石の除幕式と公園のオープニングイベントが二〇二二年八月十一日に開催されました。

湯ヶ島散策の折にはぜひお立ち寄りください。

編集後記

『伝書鳩』二十三号をお届けします。

坂巻隆裕さんは、父・井上修一が筑波大学に勤めていた頃のゼミ生です。ドイツにおける日本文学受容、『伝書鳩』にとってとても新鮮な切り口でした。今号も、執筆者の方々に心より御礼申し上げます。

この夏に、やっと靖の「終戦前後日記」の翻刻に取りかかることができました。判読できない字にどれだけ悩まされるだろうという不安がありました。しかし作業を始めてみると、本号掲載分はまだ日記の冒頭部分だったこともあり、日々を意識的に記録しようとする靖の意気込みが感じられる丁寧な書き方で、仕事に家庭にと彩りのある日々を楽しく読み進めることができました。

しかし、次号以降、次第に戦争の色合いが濃くなっていきます。そしてひたすら食べ物を求めて奔走する毎日が走り書きされるようになります。

皆さま、引き続き『伝書鳩』を楽しみにお待ちください。

西村承子

伝書鳩　第23号

発　行　二〇二二年十二月十三日

編集者　西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九　井上方

印刷所　株式会社　厚徳社

発行所　一般財団法人　井上靖記念文化財団